

「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」

令和5年度

第63回 九州地区公立学校教頭会研究大会

第57回 沖縄県公立小中学校教頭研究大会

沖縄大会

報告誌

(デジタル版)

令和5年

8月17日(木) 18日(金) (水)

1日目 分科会

会場：那覇市文化芸術劇場なは一と(小劇場)

マリエール・オークパイン那覇

教育福祉会館 沖縄県市町村自治会館

沖縄県青年会館

2日目 全体会

会場：那覇市文化芸術劇場なは一と(大劇場)

第63回 九州地区公立学校教頭会研究大会 沖縄大会報告誌

も く じ

1	第63回九州地区公立学校教頭会研究大会沖縄大会を振り返って(御礼)	1
2	開催要項	2
3	全体会・分科会会場一覧	3
4	【1日目】分科会の様子	
	(1) 第 1 A 分科会	4
	(2) 第 1 B 分科会	11
	(3) 第 2 分科会	18
	(4) 第 3 分科会	25
	(5) 第 4 分科会	32
	(6) 第 5 A 分科会	39
	(7) 第 5 B 分科会	46
5	【2日目】全体会日程	53
	(1)開会行事写真	54
	(2)記念講演写真&講演原稿	56
	(3)閉会行事写真	70
6	第63回九州地区公立学校教頭会研究大会沖縄大会当日参加・欠席者数	71
7	大会参加者アンケートまとめ	72
8	第63回 九公教研究大会沖縄大会 写真集	78

『九州は1つ』
沖縄で みんなに会えて
うれしかったサー



次回大会の宮崎で
また みんなと 会えると
いいねえ……

第 63 回 九州地区公立学校教頭会研究大会沖縄大会を振り返って（御礼）



第 63 回九州地区公立学校教頭会研究大会
沖縄大会実行委員会

実行委員長 知念 英也

第 63 回九州地区公立学校教頭会研究大会沖縄大会を、8 月 17 日・18 日の 2 日間、那覇市で開催しました。九州各県から会員約 900 名が参加した 4 年ぶりの参集型大会となり、コロナ後初となった大会を成功裏に終

えることができましたことを大変嬉しく思います。

本研究大会を開催するにあたり、公務御多用のところ、御出席を賜りました御来賓の方々をはじめ、沖縄県教育委員会、那覇市教育委員会、沖縄県小・中学校長会、九州各県教育委員会、全国公立学校教頭会並びに関係諸団体各位、分科会において指導助言をいただきました皆様に衷心より感謝申し上げます。

また、琉球大学工学部教授/H2L 創業者・代表取締役の玉城絵美氏をお招きし、「メタバース空間上の Body Sharing」の演題で記念講演をしていただきました。人間とコンピュータの情報交換を促進することで、豊かな身体経験を共有し、固有感覚を体験していけることや文法を正しく伝えることが技術活用に繋がっていくことなど、今後の教育の方向性について指南していただきました。

本年は第 13 期全国統一研究主題「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」になったの初年度研究大会となり、【自立・協働・創造】をキーワードに九州各県で組織的、計画的に取り組んできた研究結果を会員の皆様と実際に顔を見合わせながら協議するという実り多い大会となりました。交流を通して、大会誌だけでは伝わらない状況や細かな情報について知ることの大切さを離島である沖縄県においてはより一層強く感じ、改めて参集型大会の良さを実感する機会となりました。

今後も、将来の予測が困難な社会の中で、子供たち一人一人が未来を創り出していくために必要な資質・能力を確実に育ていける学校教育を実現できるよう努めてまいります。副校長・教頭の力量を高め目標達成に繋げるためには、研究を行う上で大切にしている【継続性・協働性・関与性】に焦点を当てた実践的研究を計画的に進めることが、重要だと考えています。

結びに、「九州は一つ」を合言葉に、本研究大会が九州各県の学校教育の一層の充実と発展に寄与できますことを念願し、さらに会員皆様の御活躍と御健勝を祈念しまして大会の御礼のことばとさせていただきます。

令和 5 年 10 月吉日



開催要項

九州地区公立学校教頭会研究大会沖縄大会開催要項

第63回九州地区公立学校教頭会研究大会沖縄大会
第57回沖縄県公立小中学校教頭研究大会那覇大会

- 1 主催 九州地区公立学校教頭会 沖縄県公立小中学校教頭会
- 2 共催 沖縄県教育委員会 那覇市教育委員会
- 3 後援 福岡県教育委員会 佐賀県教育委員会 長崎県教育委員会 熊本県教育委員会
大分県教育委員会 宮崎県教育委員会 鹿児島県教育委員会
全国公立学校教頭会 沖縄県小・中学校長会
- 4 大会主題 「未来を切り拓く力を育む 魅力ある学校づくり」
- 5 期 日 令和5年8月17日(木)・18日(金)
- 6 開催地 沖縄県那覇市
☆全体会会場 那覇文化芸術劇場なはーと (大劇場)
☆分科会会場 那覇市内 5施設 7会場
①那覇文化芸術劇場なはーと (小劇場)
②マリエールオークパイン ③教育福祉会館
④沖縄県市町村自治会館 ⑤沖縄県青年会館

7 日 程

時刻	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	
令和5年 8月16日(木)							受付	分科会 打合会	
令和5年 8月17日(木)	受付	分科会		昼食 休憩	分科会				
那 覇 市 内 5 施 設 7 会 場									
令和5年 8月18日(金)	受付	開会行事	記念講演	閉会 行事					
9:10 9:45 那覇文化芸術劇場 なはーと									

【1日目(分科会)】 8月17日(木) 那覇市内各会場

受付 9:00~9:55 分科会 10:00~12:00

昼食 12:00~13:00 分科会 13:00~16:45

【2日目(全体会)】 8月18日(金) 那覇文化芸術劇場なはーと

※会場借用が9:00開始のため、受付時間が少し遅くなっています。

受付 9:10~9:40 開会行事 9:45~10:15

記念講演 10:30~12:10 閉会行事 12:20~12:45



全体会・分科会会場一覧

日	会議名	会場	住所・電話
16日 (水)	分科会打合せ	那覇文化芸術劇場なはーと 1階 小劇場	〒900-0015 那覇市久茂地3-26-27 ☎ 098-861-7810
17日 (木)	第1 A分科会	マリエールオークパイン 2階	〒902-0061 那覇市古島1-15-11 ☎ 098-886-3030
	第1 B分科会	マリエールオークパイン 3階	〒902-0061 那覇市古島1-15-11 ☎ 098-886-3030
	第2分科会	那覇文化芸術劇場なはーと 1階 小劇場	〒900-0015 那覇市久茂地3-26-27 ☎ 098-861-7810
	第3分科会	マリエールオークパイン 4階	〒902-0061 那覇市古島1-15-11 ☎ 098-886-3030
	第4分科会	沖縄県教育福祉会館 3階 ホール	〒902-0061 那覇市古島1丁目14-6 ☎ 098-885-9621
	第5 A分科会	沖縄県市町村自治会館 2階 ホール	〒900-0029 那覇市旭町116番地37 ☎ 098-862-8181
	第5 B分科会	沖縄県青年会館 2階 大ホール	〒900-0033 那覇市久米2丁目15番23 ☎ 098-864-1780
18日 (金)	開会行事	那覇文化芸術劇場なはーと 2階 大劇場	〒900-0015 那覇市久茂地3-26-27 ☎ 098-861-7810
	記念講演		
	閉会行事		

「教育課程に関する課題」

提言

1

研究主題 社会に開かれた教育課程の実現に向けて

副主題 一地域連携と小中一貫教育の両立を目指して一

協議の柱 開かれた教育課程の実現と小中一貫教育の両立と教頭の役割について

提言者 熊本市立田底小学校 今村 正作 (熊本県)

指導助言者 那覇市立銘苅小学校 校長 宮國 義人

提言

2

研究主題 弥生地区のコミュニティースクールの推進について

副主題 一社会に開かれた教育課程を推進するために一

協議の柱 「社会に開かれた教育課程」を実現していくために、教頭として地域の人的・物的資源をどう活用し、社会教育との連携をどのように図っていけばよいか

提言者 佐伯市立昭和中学校 向暁 和博 (大分県)

指導助言者 県教育庁義務教育課 主任指導主事 上原 正人

提言

3

研究主題 主体的に学習に取り組む態度の育成

副主題 一幼小中連携によるキャリア教育の視点を活かした協働実践を通して一

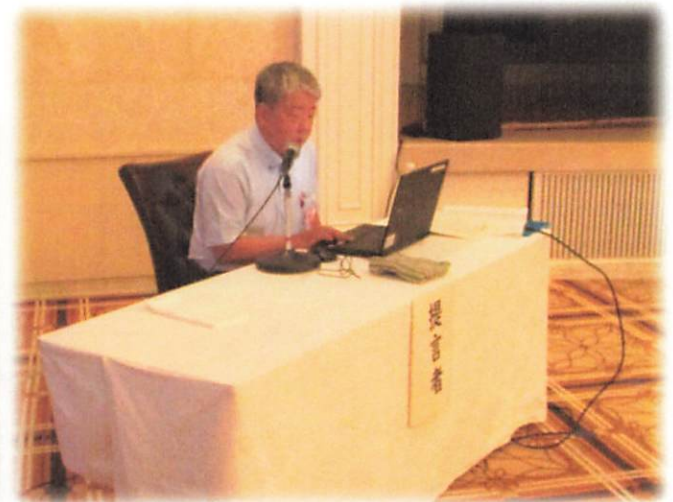
協議の柱 主体的に学習に取り組む態度を育成するために、教頭がどう関わるべきか

提言者 宜野湾市立宜野湾小学校 松尾 博生 (沖縄県)

指導助言者 県教育庁義務教育課 主任指導主事 上原 正人



分科会 第1A オークパイン2階 10:00~





第 1A 分科会 【 提言 1 】
熊本県 田底小 今村 正作

I 質疑応答

Q1 「小中一貫教育で目指す子供の姿」というビジョンをどのような方法で作成したのか

A1 各部会に分かれて話し合いを持ってコーディネート部会で総括し、さらに各学校の校長同士で話し合っ、ビジョンを作成している。

Q2 教頭として、児童生徒の課題について、どのように情報収集しているのか。

A2 小中連携の日に各部会をまわっている。その中で、各部会がどのような話し合いをしていて、どのような事に繋がるのか、教頭で動き回り把握することで課題となることを見つけている。

Q3 学校のねらいと地域のねらいが合わなくなることがある。地域連携を行う上で、事前に留意されていることがあれば教えて欲しい。

A3 毎年、合同で行う取り組みをチャレンジしていけば、地域共通の課題も見いだせると考えながら模索している。

Q4 施設分離型における小中一貫校のメリットは何ですか。

A4 小中のカリキュラムを確認し、9年間を見通した調整をした。中1ギャップ等への対応として、同じ方向を向いて子供たちへの支援ができる。

II 研究協議

【グループ協議（抜粋）】

1 児童生徒の人間関係の固定化を崩して改善するためにも小中連携のメリットがある。子供たちを地域行事に参加させて育てていきたいという地域の思いと、働き方改革を進める中で職員から理解を得るのが難しい場合があり今後の課題である。

2 教育課程は地域に広げていくことが大切であることを再認識させてくれた提言である。小中一貫になると、小学校1年生から中学校3年生まで、全員が一つのビジョンを基にしてベクトルを揃えていく良さがある。沖縄県も今後小中一貫教育が進んでいくと感じた。働き方改革の視点からは、PTAを活用することで、地域と連携した教育課程を推進できると思う。

【全体協議】 全体協議の発言はでなかった。

指導助言 1

《沖縄県那覇市立銘苅小学校 校長 宮國 義人》

社会に開かれた教育課程について「何のためにやるのか」ということをまず明確にする必要がある。田底小学校では、文科省がまとめているものを具体的に職員や保護者に落とし込める表現で簡潔に示している。

校長の経営方針と小中一貫教育で目指す子供の姿を基に「できることを」「できる組織・体制で」を焦点化して推進している。教育課程は児童の実態・現状を分析する必要がある。それを踏まえて保護者・地域の願いや学校力(強みと弱み・組織)などを把握する。そして10年後、20年後に必要な資質・能力を考える。その上で小さな改善の積み重ね、スモールステップ方式でPDCAを回していく。「無理もなく、無駄もなく」という意識で進めていくことが大事だろう。

校長の経営方針と小中一貫教育で目指す子供の姿を視覚化し「見せる」ことは大事である。学校として、どこに向かって進めばいいのかベクトルを揃え、日々の実践において職員一人一人が意識するだけで一步一步が着実な積み重ねとなり、児童生徒を育てることに於いて学校全体として大きな推進力になる。

教える側が「何のために学ばせるのか」ということをしっかり理解することが重要である。簡単に言うと「思考・判断・表現力等」になる。子供が「自分の頭で考えることができるか」「判断することができるか」「自分の言葉で伝えることができるか」ということである。

さらに文科省から言われていることに「人間性」がある。これからの世の中では、企業の枠、あるいは国の枠を取っ払った中で仕事をしていくことが求められる。単なる知識能力があるだけでは選ばれないと言われている。「この人と仕事をするのが、自分の為にもなるし成功にも繋がるし楽しさも味わえる」という人間性の部分も大事である。このことを教師が認識して授業に臨むことが大切であり、教師に認識させ「一歩先を見ることができるようになる」ことが教頭の役割である。

今後の方向性としては、学校・職員・地域・体制等も含めて整理をして共有していくことが必要である。「森(目的)を見て、木(児童)を見る」あるいは、逆に「木を見て森を見る」ことで確認していく。そういう作

業をどんどん進めていくのが教頭の役割であろう。

教頭として大切にしてほしいこと。「笑顔で大切に経営を楽しむ」「夢や目標を語り合う」こと。特に重要なのは「未来に責任を持つ」こと。目の前の子供の未来に責任を持つ。今、務めている学校の5年後、10年後の未来に責任を持つ。

地域に信頼される学校になるために責任を持つ。教頭は、学校長のビジョンを支え、教育課程を含むすべてにおいての柱である。それを職員や保護者、地域に落とし込んでいくのが、教頭の役割である。子供たちの姿を見て、分析し、教育課程に生かす。子供が常に真ん中にいるという状態で教育課程を編成して実施していく。その中核にいるのが教頭である。自身の学校で実践してほしい。



第 1A 分科会 【 提言 2 】 大分県 昭和中 向暁 和博

I 質疑応答

Q1 働き方改革との兼ね合いもあるが、これらの活動がどの時間で行われ話合いがされているのか。

A1 会議等は、3時後から行い勤務時間内に終わるようにしている。作業部会の回数が多く、地域との連絡調整が大変だったため、回数を減らし、隔年で行う等の調整を行った。職員は全てに参加できないので、管理職が地域に参加することで同意を求めている。

Q2 持続可能なコミュニティ・スクールにするためにどうしたらよいか。また、将来的な展望があるのか。

A2 地域の方がメインになってやってくれるといいが、現在は中学校、小学校でやるべき役割もあるので、学校が核となってやっているところである。

Q3 体験活動等は、学校側で設定して取り組んでいる課題なのか子供達の興味・関心による活動なのか。

A3 ゴミ拾いなど、子供達が主体となってやっている活動もあるが、教師主導でやっている活動も多い。

Q4 職場体験等の地域コーディネーターとの連携について、どのように関わっているのか。

A4 多少の打ち合わせはあるが、職場体験場所の連絡調整まで、コーディネーターの方がやってくれている。

II 研究協議

【グループ協議（抜粋）】

1 地域コーディネーターの方がいて、非常に助かっている。また、コーディネーターが中心となって教育活動を提案し調整している学校もある。

CSの持ち方については課題もあり、行政から方針や活用についての提案が不十分と感じている。

地域の中で人的資源が、なかなか見つからないのが課題である。学校に協力的な地域の方もいるので、地域人材の有効活用につなげていきたい。

2 地域人材の活用では、顔写真付の人材マップなどを作成している。共通の課題としては、登録者の高齢化があり、新しい人材を発掘していく必要がある。

地域コーディネーターの活用では、どの学年でどの人材が必要か調整しながら行っている。また、組織図を作成し、人材活用を図っている学校もある。企業とも連携しながら職業体験の取組もしており、「体験で終わらせない、子供達の何につながるのか価値付けを行うこと」を大事にしたい。何で地域人材を活用するのか、地域の大切さやふるさとを愛する心も育みたい。



【全体協議】 全体協議の発言はでなかった。

指導助言 2

《沖縄県教育庁義務教育課主任指導主事 上原正人》

地域と共にある学校づくりを目指したCSを導入することで、文科省によると次の効果があるとされている。

- ① 保護者・地域住民が学校づくりに当事者として関わることができる。
- ② 学校教育への理解が深まる。
- ③ 災害などの緊急事態への対応の充実につながる。
- ④ 地域の方が自己有用感や生きがいを得やすくなることである。

また、全国の小中学校・義務教育学校のCS導入率は48.6%である。九州地域で全国平均より超えているのは、大分県と宮崎県である。導入率90%を超えている大分県は特に先行している地域になる。

九州以外の都道府県によってばらつきがあるが、今後は全国的にCSが導入される流れがある。

CSを導入することで、地域と共にどんな子供を育てていくか、そのためにどんな資質・能力を育むのかという視点から長期ビジョンを作成したこと、保護者・地域と共有できたことは大きな成果と言える。目的やビジョンが共有できないと、活動の理解ができずに協力していく人々が減っていく。

「活動あって学びなし」とならないよう学校、家庭、地域との役割分担ができたことも成果である。役割分担は働き方改革にもつながることであるが、働き方改革から入った学校はうまくいっていない報告もある。

「働き方改革を進めるためのCSではないので、CS本来の目的を念頭に置きながら、必要に応じて働き方改革につなげた方がよい。働き方改革との兼ね合いについては、学校運営協議会の中で学校、家庭、地域は対等な立場であるので、その点をきちんと伝え議論していく必要がある。

「なぜ地域人材を活用するのか」については振り返りが必要である。地域人材の活用が目的ではなく、子供達の活動を充実させる「本物に触れさせたい、多様な価値観に触れさせたい」などの目的を教員の中でも共有する必要がある。活動を振り返り、本当に必要なことかどうかを見直すことが大切である。

第1A分科会【提言3】

沖縄県 宜野湾小 松尾 博生

I 質疑応答

- Q1 子供の変容を生み出した背景について、特に教職員に対してどのように周知し納得させられたか。
- A1 県の児童質問紙から児童の実態が低い状況を知り、前教頭が主になって、見通しを持たせるために「単元配列表」や「かふやみ」を視覚的に表示し、職員や子供達と徹底して取り組んだ。また、小中一貫の3校が連携し、課題について何が弱いのか教頭で分析し、取組を焦点化している。

Q2 幼小の連携で、エピソードがあれば教えて欲しい。

- A2 校長がリーダーとなって進めている所である。沖縄県は公立幼稚園が、小学校の敷地内にあり、校長が園長を兼ねているので、校長の一声で小学校と同じ取組ができる強みがある。ただし、認定こども園は、園長が別にいるので連携の難しさもある。

II 研究協議

【グループ協議（抜粋）】

- 1 主体的に取り組む態度を育成するために、教頭がどう関わるべきかという話になった。
先生方の自己存在感や有用感を育まないといけない。そのために、教頭は言葉を選んで心に火をつけるような言葉磨きをしなければならない。
また、生徒たちに主体的に学ぶ姿勢を求めるとするには、先生方もその姿勢が必要である。声かけをしながら言葉に魂を乗せて、先生方をやる気にさせることが一番大事である。
- 2 教師主導の授業が多く、そこを改善していかなければ主体的に取り組むことはできない。取組は、トップダウンではなく、ボトムアップで先生方の声から出てきたら、定着していけるものと考えている。意識的に教頭と先生方が共有するような場を作っていくことが大事ではないかと考えている。
教師間で子供への指導に関して差がある。お互いを見合うような時間を設定して、よい関係づくりをしていきたい。課題としては、ミドルリーダーがいないということ、ベテランと若手のジェネレーションのギャップをどう埋めるか、そこで若手の先生方を褒めることから取り組みたい。

【全体協議】

沖縄の先生方は普段から横の連携やコミュニケーションなど、支持的風土というのが常にあって勉強になった。また、教育委員会側などからの指導や環境づくりもあり、行政からの働き掛けも沖縄にはあるということがとても勉強になった。

指導助言 3

《沖縄県教育庁義務教育課主任指導主事 上原正人》

発表にあった「かふやみ」は、沖縄県独自に使っている用語で、キャリア教育の基礎的・汎用的能力等を子供達にも伝えやすくするために「関わる力・振り返る力・やり抜く力・見通す力」の頭文字をとって「かふやみ」としている。簡単な言葉にすることで、子供達に伝えやすくなるため授業の中で日常的に意識させることをねらっている。

「共有、明確化、整合性をとる」ことは大切であるが、案外しっかり行われていない事がある。「行動連携、学習連携」など分かりやすい言葉で、整理し整合性を取っている点は成果といえる。

6年生が下級生に対して学び方を教える場面では6年生自身が伝え方をアウトプットすることで、自身の学び方への理解も深めており、下級生の「6年生のようになりたい」という思いを育んでいた。

将来の予測が困難な時代では、先生方がアイデアを出し合って学校の課題にに応じていくことが大切である。そのため、内発的改善力がある学校が注目されている。これは学校が自ら自校の課題を理解して組織的に教育改善に取り組む力のある学校で、自走する学校、自走できる学校とも言われている。そのような学校の特徴として、ミドルリーダーの存在が注目されており、教頭としてどう育成するかが今後の大きな仕事になってくる。先生方をどう学ばせ、どう動かすか。「教師の学びの姿も子供の相似形である」と言われており、先生方にも主体的、対話的で深い学びをするような仕掛けが必要である。アイデアが必要な場面では、統率面が強調された組織より、フラットの関係の方がアイデアを出しやすいとされている。また「学習する組織」の特徴では、誰の意見かが大切ではなく良いものは取り入れ、失敗について安心して話し合え、変わり続けようとする傾向があると言う。支持的風土という言葉があるが安心して意見が言えることの重要性は、大人の世界でも一緒ではないだろうか。

また、今回の実践発表から子供達の変容の姿がよく伝わってきた。数値的なデータから見え

ない子供達の変容がわかるエピソードを蓄積することも大切である。

全体総括

《沖縄県教育庁義務教育課主任指導主事 上原正人》

提言1では、地域連携と小中一貫教育の両立をふまえ、校長先生が掲げる理念を実現させるために教頭として環境を整えることの重要性を考えさせられた。具体的な実践として、保護者や地域住民に伝わる言葉を意識していることやグランドデザインを日常的に意識できるような掲示の工夫などの提案があった。「慌ててもいけない、しかし、何もしないわけにはいかない」という語は、多くの教頭が共感できる言葉であった。

提言2では、CSの推進について教頭の具体的な役割についての提案があった。CSを通して「社会に開かれた教育課程」の意味や必要性について改めて考えると同時に、働き方改革との兼ね合いという難題についても考えさせられた。

提言3では、「主体的に取り組む態度の育成」がテーマで子供の変容が見える取組であった。子供の生き生きとした姿からは、取組によって「子供達は何ができるようになったか」を考える大切さに気づく参加者も多くいただろう。

教師の学びについては、国の研修でも子供達と同じような「個別最適な学びや協働的な学び」を進めていくようなプログラムに変わってきた。ベースになっているのは「対話」と「振り返り」である。今回の協議では、グループの中で正しい答え（唯一解）が出た所はないと思う。学校の課題は複雑で難解であり、状況によって答えが変わってくる。どの意見や考えが正しいか、間違いかではなく、自分と他者の考えの違いなどから、新たな気づきを得ることが大切である。さらには、より良いものを創り出すきっかけになっていく、その後のリフレクションも大切にしていきたい。



「教育課程に関する課題」

提言

1

研究主題 義務教育学校9年間の良さを生かした魅力ある学校づくりに向けて

副主題 -教育課程の充実に向けた教頭の関わりを通して-

協議の柱 教育課程の充実に向けて、副校長・教頭としてどのようにかかわっていけばよいか

提言者 多久市立東原庁舎中央校 松瀬 清朗 (佐賀県)

指導助言者 豊見城市立長嶺中学校 校長 與那覇 正樹

提言

2

研究主題 小中の系統的・継続的な学びの取組

副主題 -「大川桐英中学校区小中一貫型教育推進モデル事業」を通して-

協議の柱 小中連携推進における、副校長、教頭の組織マネジメント

提言者 大川市立大川桐英中学校 川村 和也 (福岡県)

指導助言者 中頭教育事務所 主任指導主事 玉城 和機

提言

3

研究主題 「生きる力」を育むための教育課程の編成

副主題 -コロナ禍におけるICT等の活用による地域連携を通して-

協議の柱 ICT活用をした学校・保護者・地域との連携における副校長・教頭の役割

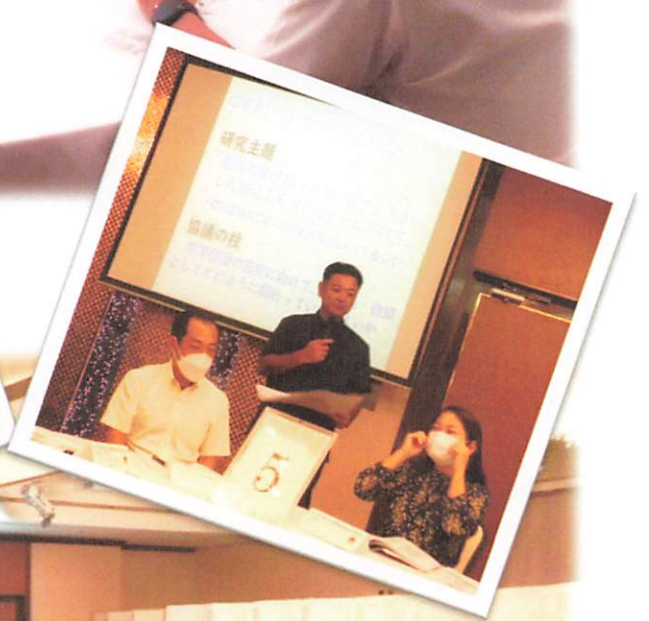
提言者 渡渡嘉敷村立渡嘉敷小中学校 外間 喜康 (沖縄県)

指導助言者 中頭教育事務所 主任指導主事 玉城 和機



分科会 第1B オークパイン3階 10:00~





第 1B 分科会 【 提言 1 】
佐賀県 東原庁舎中央校 松瀬 清朗

I 質疑応答

Q1 義務教育 9 年間の連続性と 4・3・2 制を生かしたカリキュラムによる教育実践の中で、校内研究の部会を教科ごとに編成しているということであるが、各部会の人数を教えてください。

A1 後期課程（中学の先生方）からは各教科 1 名小学校からは教科主任の先生方 1 名、多くても 4 名の編成になっている。

Q2 義務教育課程に移行したことで改善された点や良い点などはどのようなものがあるか。

A1 取組の良さとしては、中学生が優しく落ち着いており、低学年は上級生にあこがれをもって過ごせている。先生方としては取り組む上で苦労も多いが、児童生徒の育ちを見届けることができるという意見もある。また、中学校の先生方は小学校の丁寧な指導を見ることで、学びの連続性がみられるという意見がある。しかし、業務が増え、困惑している先生方もいるのも現状である。

Q3 小中学校の先生方同士の時間が合わないため、交流の時間の設定がしづらいと思うが、時間設定をどのようにしているのか。

A1 小中学校の先生方同士の交流の時間を設定するのは実質的に難しいが、話し合いの時間を設定し、校務の組織を小中の先生方が話し合いをしていくことで、お互いの立場を考えることができるので、校内の組織づくりは大切である。

Q4 リレーションシートの項目の内容について詳しく教えてください。

A1 個別の支援計画ほどくわしくないが、児童の状況やどのような支援をしていたかを特別支援教師を中心に記入している為、学年の引き継ぎの際には、これまでの支援が分かるようになっている。作成する時間や共通理解をしていく時間を設定しており、9 年間繋げられるようにしている。

II 研究協議 【グループ協議（抜粋）】

1 乗り入れ授業の難しさについて話し合った。のために乗り入れ授業をするのかを先生方に理解させていくことが管理者の役割であると考え。4 月で持ち時数を出していくことや学力向上に繋がることがわかれば職員の理解に繋がるのではないかと。

2 働き方改革の側面から話し合いをした。へき地校においては、義務教育学校の取り組みにおいて共通してメリットが大きいところがあった。一方、中規模校において同じ事をするとうどうなのかという怖さがある。小中連携の取り組みの中での乗り入れ授業は参考になった。職員の働き方改革を進めて行くのは教頭の組織的なマネジメント力が問われていると思う。

【全体協議】

1 新しいことをやることは覚悟が必要である。その取り組みを受け入れてくれる教師やそうでない教師がでてくるが、先生方のモチベーションを進める方法があると思う。何のためにやるのかを説明することや教育課程を思いっきり削るなどして物理的な時間の確保が大事である。

2 小中連携校のメリットとしては、生徒指導面で情報が入ってくることもある。生徒指導の時間を放課後にあてるなど連携することができる

3 小中学校の内容をより統合精選して、教育課程の編成が必要ではないか。

4 地域コーディネーターの配置については、県や地域によって違いがある。中には教頭の業務になっているところや町づくり協議会が地域コーディネーターを担っているところもある。



指導助言 1

《沖縄県豊見城市立長嶺中学校 校長 與那覇 正樹》

2006 年に教育基本法が改訂され、11 年後に東原庁舎が義務教育学校の形に移行していった経緯がある。義務教育学校と小中一貫校は、どちらも中学校との区切りを減らして義務教育の 9 年間を見据えた教育目標、学年制を 4・3・2 としたり、5・4 にしたりなどゆるやかなまとまりの教育課程を編成して、中一ギャップ等を解消していこう効果的な学習を推進していく仕組みになっている。小中一貫校と義務教育学校のちがいとしては、小中一貫校には小学校と中学校それぞれに校長先生がいて、教職員が在籍し、二つの組織とな

っている。それに対して、義務教育学校は、小中学校を一人の校長先生でひとつの組織として小学校から中学校までの義務教育を継続的安定的に一つの学校で一貫して行えるという制度になる。現在沖縄県の小中一貫校は4校あるが、義務教育学校はない。

東原摩舎という校名にも象徴されるように地域の歴史や伝統を重んじており特色あるカリキュラムを取り入れている。さらに9年間の連続性の教育実践と個を大切にす指導や保護者や地域との連携など義務教育学校による新たな意気込みが伝わってくる。仮説にあるように教頭自ら先生方に課題意識を持たせて、魅力ある学校づくりという仮説を作っている。松瀬先生らが研究しているものは、本研究会の研究の進め方にある継続性・協働性・関与性を十分意識した実践的な研究になっている。今後成果が今以上に期待されるが、これまで積み重ねてきたものであると捉えている。実際に東原摩舎東部校、中央校、西溪校の実践は、それぞれが低学年・中学年・高学年のブロックに分かれて基礎期・充実期・発展期という形に段階的具体的に目標を設定している。さらに9年間の連続性を意識した各教科の内容系統表の作成や前期職員や後期職員が乗り入れ授業を行っている。そういったものが子ども達に主体性を持たせ、探究心を引き出すカリキュラムに繋がっていくと思う。大変素晴らしい実践である。

教職員の連携を生かした個を大切にす指導では、実際に一つの組織として職員室の小中の先生方が情報交換をできるのはもとより、生徒指導部会で不登校気味の児童を把握することができ、特別支援にあたりレーションシートの活用により効果的に個に応じた対応が可能になる。さらに異学年交流、教科担任制、ローテーション道徳など様々なものを実践しながら9年間を見据えた教育を共通理解しながら実践していくことで、多様な個性をもつ子ども達を学びやすい環境（インクルーシブ的な学校づくり）が期待できるのではないか。

保護者や地域の連携ではコミュニティースクール、学校の応援団をつくっていかうとしているのが伝わってくる。東原摩舎が取り組んでいる義務教育学校の制度を生かした取り組みはこれからの

文科省が示している令和の日本型学校教育が示す方向性になってくると思う。

教頭としての役割では、教職員への助言、打ち合わせ、調整、保護者対応の支援、協力依頼など、沢山の気苦労があると思うが、教頭の役割は全ての土台になるのでがんばってほしい。

第18分科会 【 提言2 】 福岡県 大川桐栄中 川村 和也

I 質疑応答

Q1 教育課程を揃えることも難しいがこれだけの成果が出ていることがすごい。取組で工夫したこと、チームで動くための工夫は何か。

A1 教育課程においては、小中の指導計画を各職員室に掲示し情報共有を図った。それだけでは足りないため職員間で直接連絡を取り合い、行事の調整や下校時刻が小中で異なる場合は、保護者への連絡も必要となる。チームで動く工夫として、推進委員会をもって計画等の確認を行ったが、職員への負担感を持たせないように部会の数や実施する回数を減らしたが、それについては課題の1つでもある。

Q2 「同一施設型」と「施設分離型」との取組の差はないか。また、「乗り入れ授業」においては、小学校の職員は中学校の免許を持っているのか。そして、負担感はないか。

A1 「同一施設型」と「施設分離型」とでは取り組む内容に差はある。例えば、「同一施設型」では乗り入れ授業はできても、「施設分離型」では厳しい。「施設分離型」の学校との連携・協力が必要である。さらには、小中連携の前に小小連携がとても大切である。小学校職員の免許状については、中学校の免許状を持った教師しか「乗り入れ授業」は行っていない。

Q3 沢山の成果がありすごいと思うが、教員の課題は何か。

A1 指導観で特に部活動への取組に小中学校職員に認識の違いがある。また、評価の仕方についても小中学校の職員で違いがあり、中学校職員は専門性の視点での評価を重視している。

II 研究協議 【グループ協議（抜粋）】 1 小中の溝をどうしたらよいか話し合った。小中では評価評定が異なる為、教頭が話し合う時間調整を行う。取組の工夫として、話し合う内容を精選

して取り組んだり、週時程を工夫し話し合うための時間を確保したりするとよいのではないか。

2 大川桐英中学校区の取組は良い取組なのになぜ課題が多いのかについて話し合った。小中の文化の違いが原因なのではないか。小中の壁を取り除くために、乗り入れ授業の良さを管理職が積極的に伝えていくのが大切ではないか。課題解決は難しいが、「子ども主体」を第一に考えると解決策が見つかるかもしれない。

3 授業内容の面においては乗り入れ授業の難しさはある。しかし、算数が苦手な児童にとっては、小学校の先生がマンツーマンで教えてくれることは、ありがたい。

4 小中連携を推進するための教頭としての役割については、市内の小中学校の教頭で集まりをもち、教育計画を進めていく上で情報交換をしたり、悩み相談をしたりするなど、連携を密にしていく必要がある。

【全体協議】 特になし



指導助言 2

《沖縄県中頭教育事務所 主任指導主事 玉城 和機》

「小中一貫型教育」を積み上げて実践(12年間)することの大切さが実感できる提言であった。推進組織や連携授業、交流活動の実施等の「同一施設型」と「施設分離型」の事例は、全ての学校で参考となった。

研究のねらいでは3つの視点から積み上げていくところや期待される効果(児童生徒・教職員)が示され、取組の期待・方向性が見えた。

教頭の役割は多岐にわたるが、細かな連絡調整を中心に「誰が、何を、どの場面で、いつから、いつまでに、どのようにして」などの計画を立て、指示・助言・進捗の確認をしながら効率的・効果的に事業が実施されていくことをマネジメントされている。

大切なことは、方法論だけではなく、取組の「意義・在り方」を確認し、その重要性について全職員

で共有することである。

今後の方向性としては、「人材育成」である。その重要性について教頭から説明を行い、実践への参加、助言、職員の成長への価値づけを行い、教頭として職員を育てていく。また、「システムづくり」としては、小中連携から小中連携に繋げていくことが大事であり、教育委員会との連携も重要である。

連携を持続的にしていく為には、「属人的」から「システム構築」を目指して欲しい。「助けて！」と言えるチーム作りが大切である。校区内の教頭はもとより、教頭会などで助け合えるチーム、お互いにデータを共有できるような「WIN-WIN」の関係を構築することが大切である。そういったことが働き方改革に繋がっていくと思う。

義務教育9か年を見通し、共通の目標やそれを達成するための計画が必要である。また、義務教育の「出口」と子ども達の「その先の生き方」を見据えることが管理職にとって大事なことである。具体的には、小学校で身につけさせてほしい力を小中で共有していくことや中学校で伸ばしたい力を共有することが大切である。教頭先生方においては、「小中の系統的・継続的な学び」を「子どもを主語」にした教育課程を作っていってほしい。

第18分科会【提言3】

沖縄県 渡嘉敷小中 外間 喜康

I 質疑応答

Q1 ICTを活用した事例と今後の活用について聞かせてほしい。

A1 本校では、コロナ休業中はタブレットを活用して授業を実施した。今後は、会議をしたり、アンケートを取ったり等場面によって活用していきたい。オンライン等、効果的な活用も図りたい。

A2 ICTを活用し業務の効率化を図る学校がある。また、職場体験において、遠距離のため直接実施することが難しい場合は、オンラインを活用して実施した。(他県からの回答)

Q2 ICTが苦手な職員への対応と行政への働きかけ、さらに「スクラップ アンド ビルド」の展望について聞かせてほしい。

A1 ICTに詳しい職員を活用し職員の情報活用能力に務めた。行政への働きかけとしては、児童生

徒のタブレット端末が不足していたため教育委員会へ要望した。「スクラップ アンド ビルド」については、「働き方改革」を踏まえ前向きに取り組みたい。島(僻地校)では、学校行事に地域からの要望も多いため、しっかり連携して取り組みたい。

II 研究協議 【グループ協議 (抜粋)】

1 ICT 活用として、ホームページ、児童の出席管理、入学式・修学旅行説明会をオンラインで実施した。また、職員会議ではペーパーレス化に努めている。

2 ICT 活用には個人差があり、若い職員から習うケースが多い。

3 地域連携に関しては、今後の課題である。

4 地域との関わりとしては、ICT よりも直接対面での関わりがよい。

5 ICT 担当をすべて教頭が行うのには無理がある。人材育成の点からも校務分掌を整理して分担して行うほうがよい。

6 PTA の会議は ZOOM を活用しており、今年度は PTA の予算で契約している。

7 校種間では、オンラインを活用して交流している。また、島の良さを発表し合ったり、児童のがんばっている姿を発信したりしている。

【全体協議】

1 「スクリレ」を導入しており、加入率を上げるためにいろいろと取り組んだ。今年度途中からペーパーレスにしたため、保護者からは苦情が多かったが、家庭訪問や保護者面談等で呼びかけた為、加入率は 100% となった。

指導助言 3

《沖縄県中頭教育事務所 主任指導主事 玉城 和機》

学校の HP の充実やメール配信が保護者の安心に繋がっている。また、オンデマンド配信をすることにより、修学旅行保護者説明会の内容を何度も確認することができ、オンライン授業をしたことで不登校生徒が参加できたことにつながっている。また、学校フェイスブックを活用することでセキュリティ面において一つの方策になると思う。さらに、成果と課題の共有のみならず、取組のマインドの共有ができた。

OECD が示した学びの羅針盤 2030 では、何のために学ぶのか、どのようにして学ぶのか、どんな力が必要なのかが集約されている。生徒エージェ

ンシーとは、「生徒が自分の人生や周りの世界に対してポジティブな影響を与える意思と能力を持っている姿。変革を起こすために目標を設定し、振り返りながら責任ある行動をとる能力。」と言われている。また、共同エージェンシーとは、「エージェンシーが有機的にそれぞれ他のエージェンシーと関係し合い、成長と学びが可能になる。」説明が加わっている。こういった子ども達を育てていこうとしている。

コロナ禍において、休校対応や保護者対応、保護者への情報提供、地域連携等を進めてきたのは教頭であり、教頭エージェンシーである。教頭自身が新しいものに取り組んでいく姿勢をもってほしい。

全体総括

《沖縄県中頭教育事務所 主任指導主事 玉城 和機》

教育振興基本計画の第 4 期では、次期の学習指導要領方向性が出た。2つのコンセプトとしては、2040 年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成と日本社会に根差したウェビングの向上が挙げられている。

今後の教育政策に関する基本的な方針で、「グローバル化する社会の持続的な発展に向けて学び続ける人材の育成」「誰一人取り残されず、すべての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育の推進」などがある。その意義を考えていくことが教育の充実に繋がると考える。

教頭としての資質・能力は、組織づくりと学校外とのコミュニケーション能力が求められている。また、教員同士の校内文化の醸成、心理的安全性の確保、ファシリテーション能力である。「先を見る力・意義、重要性について語る力・つながる、つなぐ力」が大事である。教頭自ら「対話」をしていくことが管理職に課せられたものではないか。



第2 分科会

「子供の発達に関する課題」

提
言

1

- 研究主題** 児童の特性に応じた適切な学びの保障
副主題 ー教頭としての教職員への助言や支援及び関係機関との連携を通してー
協議の柱 児童の特性に応じた適切な学びを保障するための副校長、教頭の役割
提言者 西都市立韓北小学校 畑田 史人 (宮崎県)
指導助言者 宜野湾市立宜野湾小学校 校長 甲斐 達二

提
言

2

- 研究主題** 4・3・2の9年間を見通した児童・生徒の育成
副主題 ー小中連携を推進するための教頭の役割についてー
協議の柱 「4・3・2」のよさを最大限に生かすための教職員指導のポイント
提言者 いちき串木野市立串木野中学校 長岡 哲仁 (鹿児島県)
指導助言者 県教育庁義務教育課 主任指導主事 瀬名波 淳

提
言

3

- 研究主題** コミュニケーション能力を高め多様性の受容ができる児童生徒の育成
副主題 ー市内全小中学校で取り組む「社会性と情動の学習(SEL-BS)」に係る組織体制づくりー
協議の柱 子供の学びや育ちを支える効果的な組織体制づくりのための副校長・教頭の役割
提言者 うるま市立具志川東中学校 松浦 雅子 (沖縄県)
指導助言者 県教育庁義務教育課 主任指導主事 瀬名波 淳

第2分科会



分科会 第 2

なは一と小劇場 10:00~





第2分科会 【提言1】 宮崎県 穂北小 畑田 史人

I 質疑応答

Q1 フリースクール登校児童について、出席扱いにした経緯を教えてください。

A1 教育委員会に相談し、教育委員会がフリースクールを視察後、みつば教室を介して行うのであれば、出席扱いと認める。

Q2 通常学級での教頭による支援はどれくらいの頻度で行い、又どれくらいになると支援をやめるのか。

A2 教頭がT2として入る場合は飛び出し児童への対応。また対応できる職員がいない場合にも教頭対応。児童が落ち着いたら、担任に引き継ぐ。

Q3 不登校児童の保護者から、「担任からの連絡はして欲しくない」と言われた経緯を教えてください。

A3 校長の情報を基に、教頭が積極的に対応していたため、保護者から「担任からの連絡はいい」ということになった。

Q4 保健室登校の児童の学習の保障をどのように行っていたか。また来室が多い場合はどのように児童対応していたのか。

A4 校長や教頭が中心となり、養護教諭が見守る中、対応できる教諭も行っていた。

保健室来室が多い場合、隣のパソコン室等の別室にて教頭等が対応することが多かった。

II 研究協議

【グループ協議（抜粋）】

1 授業が成り立たないことが、どの学校にもあると知った。アドバイザーを活用したり、継続して対応したりしている。

保護者にも粘り強く対応して行きたい。

不登校に対しては、ICTを活用して、学びの保障に努める。課題は、先生方の若年化で、職員の資質向上に努めていきたい。

保護者対応にて、長時間電話対応する場合、対面をお願いします。

担任を守る意味でも教頭対応もいいと思う。教頭が不在でも、学校では話し合いが進められるスキルが必要である。

自立支援員を活用して、外部機関とのネットワークを利用している。

職員へのメンタルヘルスなどから、相談しやすい環境づくりが必要である。

2 現在の教頭は、関わり方が深く、フットワークが軽い。フットワークが軽いのはよいが、次の教頭が行うのはどうだろうか。組織体制で動くということが大事では？司令塔やコーディネーターとしての役割としてどうだろうか。

誰が対応しても学力の保障ができるようにした方がいいのではないだろうか。保健室対応、別室対応ができる部屋があり、支援員がいる場所を利用する。

人手不足が課題。教頭が授業をしているところもある。児童の支援、保護者の支援、担任の支援等を組織で行うことが強く求められる。

【全体協議】

特に無かった為、指導助言の時間にあてる。



写真① 提言1のグループ協議の様子

指導助言 1

《沖縄県宜野湾市立宜野湾小学校 校長 甲斐達二》

「教頭が教職員への助言や支援及び関係機関との連携を工夫・改善していけば、学校の課題として学びの保障に繋がる」が提言の趣旨。

提言では教頭が校務を整理し必要に応じ児童の教育をつかさどる実践がなされていた。

また教職員への助言など、工夫改善することによって学校の課題解決に繋げていた。

しかし、教頭はスーパーマンではない。「畑田先生が教頭だからできるのでは疑問？学校の規模や実態に応じて対応は異なる。

教頭の役割として重要なのは、体制作りとマニュアル化が必要である。例えば問題発生等緊急対応時には、出番の順序を日頃から準備しておく事が必要。でなければ問題発生時に労力が集中し学校全体が疲弊する。

校長は学校経営、教頭は学校運営の役割があり、教頭は「さばく」ことが肝要である。

すぐに完全解決を望まなくてもよい。課題を抱える児童へは関わり続けることが大事。

各教頭におかれては学校課題の共有と交流こそが今後の糧となる。是非学び続けることを継続して欲しい。

教職員には関わりながら人材育成を行うと共に教職員の憧れる存在であって欲しい。

第2分科会 【提言2】

鹿児島県 串木野中 長岡 哲仁

I 質疑応答

Q1 小学校旧6年生担任が、中1の授業参観をしているのか。

A1 5月に旧6年担任と特別支援担任が授業参観を行う。困り感のある中1生徒への情報交換を行っている。

Q2 小中連携と小中一貫があるが、どちらなのか。また6年生のリーダー育成は出来ているか。

A1 現在の学校は小中一貫。ただ今は小中別なので、6年のリーダーシップは発揮されている。

前任の義務教育学校では、9年生が最上級生なので、6年生のリーダーシップの育成は難しかった中、6年生のリーダーを意識して育てていった。

Q3 4・3・2の良さはうまくいっていることは何か。

A1 一番良かったのは、2分前着席がよかった。生徒指導面での取組が中学校でスムーズにできていた。年6回小中の教頭研修会で教頭同士が仲良くなった。

Q4 乗り入れ授業で、中学生がスモールティーチャで活躍していたが、教育課程の位置付けはどうなっているか。

A4 小学生が中学校に行き、小学生を教える中学生が放課後に残って教えている。

II 研究協議

【グループ協議（抜粋）】

1 福岡県は小中一貫。2年目体育と理科の先生が小学校に乗り入れしている。週に10時間。3・3・3の実践を行っている。教育委員会は3・4・2を要望。生活面でも統一実践も進めている。またオープンスクールとして授業参観を実施し、ふるさとキャリア教育として地域の販売も行った。

中学校区内では家庭科の先生方に入ってもらっている。学習規律がしっかり行われるように教頭としては、情報交換を行う。それぞれ先を見越した小中一貫を実践中。

2 2校が小中学校併置校。小中の差は大きい。中学校が小学校に行って乗り入れ授業。連携がうまく進められないといけない。先生方が繋がらないとうまくいかない。

児童会・生徒会も1つでいいのでは？小学校も教科担任制になっていくと、うまくいくのではないかの意見も出た。

【全体協議】

※特に無かった為、指導助言の時間にあてる。



写真② 提言2のグループ協議の様子

指導助言 2

《沖縄県教育庁義務教育課 指導主事 瀬名波 淳》

課題としての中一ギャップ。中学校にあげる事へ重きを置くのではなく、送り出した後の成長をみとる必要がある。

学力向上や家庭学習への課題がある中、教頭会を通して、教頭が「つなげる具体」を明確に持ち、教頭会が中心となり年間計画を作成していることから教頭がコーディネートをしているという事がわかる。

共通実践は引き続き、継続し、必要に応じて見直しを行い、改善を図りながら進めるとよい。「挨拶運動」は児童生徒がやりたいという意欲を持ち、実践を行う事で更に良くなっていく。

5月には小中一貫を立ち上げて、中1の授業参観を行う事で課題が見えてくる。

着席指導については、中学校に向け小学校低学年の内から進めてもいいのではないかと。

学校規模による小中連携の良さ。ユニバーサルデザインを取り入れる等も良い。

児童生徒が行きたい学校になっているのが成果。中学校生活を楽しみにしている児童が80%を越えていることに感心した。

家庭学習での課題として、各学年に応じたの時間指定、ページ指定等があり、宿題に対して生徒はやらされ感がでる。

家庭での学習は児童生徒自ら思考錯誤し、目的をもって学習を行う。家庭学習は授業と関連させ行う等の方が良いのではないかと考える。

第2分科会 【提言3】

沖縄県 具志川東中 松浦 雅子

I 質疑応答

Q1 SEL-8S の内容をもう少し具体的に教えて欲しい。また、年間計画に位置づけるときの注意事項は？

A1 SEL-8S の実践例に基づいて使えるものを使用している。例えば、「だめ!万引き防止」「喫煙防止」など授業で行っている。また道徳の前のアイスブレイクでも活用している。

Q2 校内の組織体制の中で、特に研究主任との連携が載っていますが、教頭としての役割を教えてください。

A1 校内でのSEL-8S担当(各学年)と教頭との話し合いの場を作り、教師のやりやすさを感じられることが教頭の役割だと思っている。

II 研究協議

【グループ協議(抜粋)】

1 役割としては、つなぐ。職員間のコミュニケーションが重要。課題としては、校長からのグランドデザインがなかなか下まで伝わっていなかった。2年目の時に、教頭が中心となって職員に説明。全職員への周知に努めた。新しいものを取り入れるために、先生方ともコミュニケーションを図りながら進め、日々の授業参観を通して、情報担当につなぎ ICT 教育も実践、学年会でのOJTを通して、若い先生方から教えてもらうなど、教頭がリードしながら進めていくことが大切である。

2 人間関係プログラムを週に1回行っている学校があった。

自己肯定感を高める取組に課題がある。子ども

同士のつながり、コミュニケーションを図りながら、特別活動の充実を進める。

教師と生徒のつながりも大事ではないか。心理的安全のためにも、触れ合い、組織的にどのような力を育てるか勉強会を行う必要があるのではないか。

ICT活用で家庭とも繋ぐのが必要ではないか。

【全体協議】

※特に無かった為、指導助言の時間にあてる。



指導助言 3

《沖縄県教育庁義務教育課 指導主事 瀬名波 淳》

全小中学校でうるま市の課題解決に向けた取組に対し、調整係として教頭がリード、つなぎとして活躍している結果が今回でている。

自己肯定感が低いという課題がある為、学びを高める為の取組が必要である。

自己肯定感の取組等を5年間実践していくという取組を教頭として組織作りを行う等、教頭の活躍の場面、調整としての教頭の役割は大きいと思った。

道徳、学活、総合的な学習の時間とのつながりを考えた年間指導計画の位置づけがある。

SEL8-Sに対し全体で理解、議論を重ね取り組んでいる姿がある中、納得してもらったうえで、進めている。

新しく入ってきた先生方にも理解して進めている。

校内でもしっかりと研修を深めていると話もありました。

生徒の質問紙でも、「先生がわかる授業をしている」と答えた生徒が80%と、「学校に行くのが楽しい」という子ども達の気持ちを育てる事が大切。

令和7年度までの検証と言うことで、しっかりと検討して欲しい。引き続き取組を重ね、時代時代にあったプログラム作成に当たると良い。今後、ICT活用も含め取り組み、生徒の変容が楽しみであり、自己肯定感の高まりに期待している。

全体総括

《沖縄県教育庁義務教育課 指導主事 瀬名波 淳》

提言1では教頭としての各関係機関の連携に対して教頭自ら先頭に立って進めている中、チーム学校として進めていく事が今後も必要である。

諸問題に対しての完全な解決ではなく、「関わり続けることが大切」という事を重視して欲しい。学校として関係機関と連携しつつ、各関係でどのような事がおこなわれているかをしっかりと把握する事も求められる。

提言2, 3では教頭としての役割を明確にし、進めていくものであった。

子どもの発達に関する課題に関して、魅力ある学校づくりを進めて欲しい。



「教育環境整備に関する課題」

提
言

1

研究主題 愛着と誇りを醸成するふるさと教育への関わり

副 主 題 -学校・地域・校内の連携力を高める取組を通して-

協議の柱 学校・地域・校内の連携力を高めるための教頭としての関わり

提 言 者 豊仙市立多比良小学校 小無田 貴 (長崎県)

指導助言者 名護市立大宮中学校 校長 新里 勲

提
言

2

研究主題 自他を大切にし、未来を切り拓く力を備えた生徒を育成するための教頭の役割

副 主 題 -自尊感情を高め、自他の人権を尊重できる環境整備に向けての教頭の役割について-

協議の柱 人権が尊重される学校教育を実現・維持するために、教頭として環境整備づくりにどのように関わるか

提 言 者 玉名市立玉陵中学校 小山 忠仁 (熊本県)

指導助言者 国語教育事務所 主任指導主事 喜屋武 匡

提
言

3

研究主題 安全管理に関わる環境整備の推進

副 主 題 -学校課題の改善に向けた協働による取組を通して-

協議の柱 働き方改革を踏まえ、児童生徒等が生き生きと活動し、学べるようにするための安心・安全の確保について、学校・家庭・地域・関係機関との連携はどうあるべきか

提 言 者 宮古島市立伊良部島小学校 砂川 栄作 (沖縄県)

指導助言者 国語教育事務所 主任指導主事 喜屋武 匡



分科会 第3 オークパイン4階 10:00~





第3分科会 【提言1】

長崎県 多比良小 小無田 貴

I 質疑応答

Q1 ふるさと人材に向かう目標を地域と共有するために、どのような場を設けているか。

A1 A小学校では、いわと教育会議を行い、学校として、子どもたちの「こういう力を身に付けさせるために、こういった学習を進めていきます。」という思いをお伝えする。また、地域の方のご意見を受け止めながら、学校としてできる事の合意形成を図っている。B小、C小においても、地域の方に対して、学校としての学習における「ねらい」をお伝えして協力を頂けるよう、学習活動の最初の段階で理解してもらうようにしている。

Q2 持続可能なふるさと教育をやっていくために、教頭、教職員の負担増が課題だと思うが、学校の教育活動内でおさめていくために、教職員への働きかけなどどのように共通理解を促していくか。

A1 話合いの時間、練習の機会も勤務時間内に行うよう調整する。教頭、地域連携コーディネーターの負担が大きくなりすぎないようにする。地域の方、地域側の学校連携のコーディネーターを通して働きかけ、関わりを協力してもらう。今後、地域に移行できるものは、できるだけ地域に移行していきたい。

Q3 市内のふるさと教育の実践研究との事だが、
(1) 3つの小学校は、同じ中学校区の小学校なのか。連携具合はどうか？ どうやって調整しているのか。
(2) コロナ禍前と以降でどのように変わったか。
(3) 学校内にふるさと教育の担当はいるのか。

A1 同じ中学校区ではないので、話合いの機会を設定して進めてきた。

A2 R2、R3は、時間を短くしたり、人数や子どもたちの行く機会を減らしたりしたが、R4からは少しずつ体験活動を増やしている。

A3 A小は地域連携担当をおいている。その先生の負担が多くなるように教頭が実際に出向いたり話しをしたりして連携している。

Q4 連携力を高める取組みを通して、愛着、誇りだけでなく、地域の方々や学校での教育的波及効果

があれば、教えて欲しい。

A1 校外的な学習では、校内での職員のつながり、信頼関係がないと進めない。相談したり一緒に考えたりすることでいい雰囲気でも地域の方と学習を進めることができる。学校としても地域の方から、いい雰囲気でも教育活動を行っているとの見方をしてもらっている。地域の方とのつながりをしっかりと学校が持つことによって、子どもたちに地域の方が目を向けてくださったり、地域の方と子どもたちとの関係が近くなって、より声をかけてくださったり、あいさつしてくださったりする。地域の方が子どもたちを見守る雰囲気が高まっている。

II 研究協議 【グループ協議（抜粋）】

1 地域との関わりについては、各学校で方法も地域の実態も異なっていた。保護者と友好的な信頼関係を築き、一丸となって取り組んでいる学校もあれば、教頭が夜遅くまで一人で準備をしている学校もあった。校長の方針のもと、保護者も色々な職員も色々いる中、話し合いながら連携している。ふるさと教育は、地域の良さを教員が知る教育だと考える。

2 ふるさと教育では、教頭がやりすぎの部分がある。学校がなくなると地域がつぶれると、統廃合に厳しい地域もある。次の人が困らないよう、うまくマニュアル化できるといい。また、PTAとの連絡にはLINE、スクリーン、Googleなど、通信手段のアプリを活用している。校務支援でも活用。

【全体協議】

1 共有事項等はなかったが、提言者から、「ふるさと教育」は、子どもたちが、他の地に出た時自分が生まれ育った所を思い出した時、こういう良さがあったなあと、子どもたちの心に残るものであって欲しい。」という意見がでた。

指導助言 1

《沖縄県名護市立大宮中学校 校長 新里 勲》

研究が3つの視点で整理されている。1つ目は保護者、地域との連携づくりについて。地域と連携した学習は、子供たちが地域の良さを改めて発見することができる。社会に開かれた教育課程の視点からも子供たちが多くの人と関わり、体験を積み重ねることで社会を生き抜く力として必要となる基礎的な能力が

身についていく。コミュニケーションや自主性、協調性、想像力などの育成に大いに役立つ。大切なことは、保護者や地域への丁寧な説明。保護者、地域との連携を通して学校は子供たちに何を感じ取らせ、何を学ばせたいのか。小学校、中学校卒業までにどのような力を身につけさせたいか。目指す子供像、地域の願い、思いをくみ取って、それを明確にすることが大切である。

2つ目、教職員の人材育成についてはチームとしての学校づくりがまず第1。管理職、教職員との信頼関係づくり、日頃の関わりがとても大事。教頭先生方は、職員室の雰囲気づくりに努めて欲しい。若手教員やミドルリーダーの育成にも努めて欲しい。ミドルリーダーとしての役割やキャリアに応じたマネジメント。仕事は任せ、成功体験を増し、頼られている感じとらせる。校長のビジョンのもと、たてよこの関係を大切にベクトルをしっかりと合わせていくことが大事。

3つ目の学習支援・環境整備については、地域学校開放日などを設けては。運動会、学習発表会など合せ、自治会長、民生員、交通安全指導の方々を足を運びやすくし、来てもらうことが大事。よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという理念を学校と社会が共有し、社会と連携、協働しながら未来の創り手となる子どもたちに必要な資質能力を育てて欲しい。

学校と地域の橋渡しになるのが、コミュニティスクールである。学校運営協議会の会長がコーディネーターとして、学校と地域を繋いでいく。

地域と連携した体験活動を充実させるためには、継続した取り組みが必要。地域を巻き込むことが大切。管理職や先生方が変わっても続けられる体制づくりが必要。子供たちが地域を好きになる。愛着と誇りを持ち、育っている、生活している場所が好きになること。学校と地域、保護者が、ウィンウィンの関係でお互いを支え合うことが大切である。

第3分科会 【提言2】 熊本県 玉陵中 小山 忠仁

I 質疑応答

Q1 小中連携での教頭の調整について、調整はどのように行ったのか。また、その際の困ったことや課題は何かあったか。

A1 校歌を残す取り組みでは、提案は小学校の教頭

であった。小学校と中学校の教頭が情報交換や指導を積極的に行った。

A2 校歌を残すための取り組みでは、中学校の生徒代表者が中心となって昼休みに小中合同で行った。その際に昼休み時間の調整が課題であった。(小→45分授業、中→50分授業のため)

Q2 【図1】のイメージ図作成時の過程について

A1 令和3年度の玉陵中の研究発表が基本になっている。これを他の小中学校に広げていくことを玉名市の教頭会で確認した。イメージ図については、具体的に集まって検討したわけではなくこれをもとに各小中学校で実態に応じて取組を行った。

Q3 研究の実際での【図2】の人権が尊重される授業づくりの視点例と授業を参観する側にも、わかりやすい学習構想案になるように工夫したとあるが、これは、教頭が工夫したのか学として方向づけをしたのか。

A1 【図2】と【図3】は非常に素晴らしい内容であるので他の小中学校でも活用してもらいたいと思って玉名市全小中学校の教頭に配り、それぞれの学校において校内研究等で確認し活用している。

Q4 資料を私たちが活用したい場合の連絡先はどこか。また、ピンクシャツデーは子どもたちからの声で生徒会が主体となったのか、人権教育を行った結果位置づけられたのか。

A1 資料は玉陵中に問い合わせたら対応できる。

A2 ピンクシャツデーは生徒からの提案で生徒会が2年前に始めた。それが小学校の学校運営協議会に広がった。

II 研究協議 【グループ協議(抜粋)】

1 教頭として子どもと直接かかわることが少ないので、教頭の関わりに課題があるのではないかと。教頭の関わり方は、職員にアドバイスすることが大切であることや、校長と相談して学校教育目標重点項目に位置付けることが大切。

また、日頃の取組として月に一回それ以外にも人権読本を活用した放送委員会による人権教育が大切である。

人権教育を進めるには定期的な人権教育が大切。

2 教頭として授業づくりにどのように関わればいいのか。また教頭として環境づくりにどのように関わるのか。地域・保護者に人権に関するアンケートを実施してその結果を掲示することで大人からみた人権に関する考えを子どもたちにわかってもらう。また、スクールロイヤーを活用しての人権教育や警察との連携。さらに子ども同士の呼び名（さんづけ）。LGBT への配慮として制服の選択制。トイレに関しては障がい者用のトイレを共用にして『誰でもトイレ』にしている。

【全体協議】 1 特になし



指導助言 2

《沖縄県国頭教育事務所主任指導主事 喜屋武 匡》

人権に関しては、近年、「児童の権利に関する条約」「児童虐待の保護指定に関する法律」が制定された。学校教育においては、「いじめ防止対策推進法」が制定されるなど人権を保障していくための取組みが進んできた。しかし、紛争や児童虐待、いじめ、まだまだ人間が理想とする社会になっているとは決して言えない。そのために学校における人権教育が大変重要となる。学校教育全体を通じて人権を育むことが必要である。提言では、人権教育を通じて育てたい資質能力の3つの側面を踏まえて、それぞれの取組みを整理されていた。特に「知識的側面」は変化の激しい社会において子どもと指導者がアップデートしていくことが重要だ。

人権が尊重される授業づくりについては視点例を作成し、すべての教科において資質・能力を設定し学習構想案に明記するなど環境づくりをしたことは大きな成果である。人権を大切にしたい行事等については生徒会活動でピンクシャツデーを設定したことは人権について、学校・家庭・地域で考える大きな機会になっている。アンケートの結果では「人の役に立ちたい人間になりたい」の問いに対して「すべての生徒が「なりたい」と答えていることから、取組の成果が表れている。

課題としては、人権が尊重される学校教育を実現維持していくための環境整備を教頭としてどのようにするのが課題である。教頭として基盤づくり、仕組みづくりの役割が大きい。組織づくり、連絡調整、評価・改善などで、成果が表れたものと思う。今後は、働き方改革の視点を含めて持続可能な仕組みを行っていくことが重要である。

第3分科会 【提言3】

沖縄県 伊良部島小 砂川 栄作

I 質疑応答

Q1 自然災害等で登下校の時刻を変更する場合判断基準について

A1 台風の場合は、教育委員会のガイドラインがあり、教育委員会と市役所、气象台、その他関係機関が協議を持ち、台風の強さや暴風警報が発令されるタイミングを情報共有し学校に連絡をする仕組みになっている。その中で、暴風域に入ると思われる危険な台風に対しては、早めに警報をだしてもらっている。その場合、児童の安全を考慮し、警報を出すタイミングを朝早くか前日に警報をだすようお願いし、対応している。

Q2 通学路が広範囲になっているが、安全確保について、どれくらいの通学路の指定と修繕を依頼しているのか。また、通学路の安全確保を組織的で取り組んでいるのか。

A1 危険箇所（ブロック塀や側溝の損壊、ため池等）については地域・保護者の協力を得ながら行政を通して修繕をしている。

A2 組織としての取組については、文科省からの調査点検などの依頼で組織的に取り組んでいる。地域の協議会などで定期的に組織的に取り組んでではなく、今後の児童の安全確保のために取り組んでいきたい。

II 研究協議 【グループ協議（抜粋）】

1 安全マニュアルの見直しを教頭会でやっている。同じ条件の学校同士でチェックし合い改善し見直している。また、市民総ぐるみで避難訓練を実施したり自動車教習所を貸し切り安全指導を実施したりしている事例を共有した。

2 台風の対応については、教育委員会から早めの通知をもとに学校では対応している。働き方改革の視点では、さまざまなアプリがある。それぞれの学校が活用して

いるアプリの特徴について共有した。安全管理は学校だけではできない。行政との協力が大切である。

【全体協議】 特になし

指導助言 3

《沖縄県国頭教育事務所主任指導主事 喜屋武 匡》

安全管理に関わる環境整備について分かりやすくまとめられて参考になった。学校では、安全管理は最優先のことであり、協議においても活発で具体的な意見交換ができた。主題設定については、各学校の教頭が大変な思いで取組んできたことなので、自校の取組みと比較しながら自分事として考えることができた貴重な提案であった。登下校における安全管理については、地域と連携し様々な役割をもつ大人が子どもたちを見守っていることは、子どもたちに心理的安心感を与えている。それは、教頭を中心として、日常的なコミュニケーションが基盤としてあると考えられる。迅速な情報提供(臨時休業、学校行事の変更、下校時刻の変更)に関しては、児童生徒用のタブレットPCやメール、HPを活用して連絡体制を構築したことは安全管理に関わる環境整備において重要なことである。情報を読み取って主体的に行動していく資質・能力はこれからの時代にかなり重要となってくるので、児童用タブレットの活用は有効である。学びの保証については、オンライン授業マニュアルの作成はオンライン授業を迷わず行うことができ、ハイブリット型授業は、不登校児童対応の参考になる。その場合教師の負担増にならないことが課題となる。

生徒会が関わる主体的な避難訓練では、これからの防災教育の在り方を示すもので、大変効果がある。地域行事で行う避難訓練は各学校の特色を生かした価値のある取組である。ここで得られた情報を各学校の取組として一層充実していくことを期待する。

全体総括

《国頭教育事務所主任指導主事 喜屋武 匡》

第3分科会のテーマである「教育環境整備に関する課題」はかなり広く捉えることができる。教育環境整備に関しては、ハード面は学校の施設の整備、安全に関する立て看板の表示、情報機器等の備品整備がある。

ソフト面については、学校、家庭、地域との連携のための組織づくり、風土の醸成、小中一貫教育の組織づくり、小中連携の組織づくり、授業づくりの共通実践事項の作成や研究の組織づくり情報を伝達してい

くための仕組み、目標を実践していくための風土の醸成があげられる。提言では主にソフト面が多かったが、両方の教育環境整備の推進の要として教頭が重要な位置にある。そのため、業務の種類が多く、多忙になっているが、そのような状況でも尽力した成果として今日の提言があった。どの提言においても共通の課題は、維持していくための負担軽減を図りながら教頭の役割をどのように果たしていくか、また役割を分担していくかである。環境を整えることによってよい影響、よい効果をもたらしている。その環境を維持していくために教頭が中心となっていくために大きなエネルギーが必要になってくる。そのためには、働き方改革の視点が重要になる。負担軽減を図りながら教育環境を維持していく一つの方法としてICT活用を進めていくことはこれから先重要である。その際は担当教諭に任せ、有用感をもたせ、育てていく視点も大切である。また、教頭の役割を分担していくことも重要であり、学校運営協議会などの地域の力に移行していくことや、生徒に任せる視点もある。それによって生徒の資質能力の育成にもつながる。さらに、ソフト面の断捨離の視点も必要であり、業務の重要なことにエネルギーを向け、環境を維持していくためにも学校における古い組織、仕組みや慣習や考えが残っている場合は思い切って捨てることも必要である。

本日の3つの提言は、よい環境を維持し、新しいものを生み出すことができ、学校、家庭、地域に大きな恵みをもたらすものである。現代は未来の予測不可能な時代になっている。莫大な情報を巧みに整理しながら大切な物を維持し変化に対してしなやかに、そして私たちにとって必要なことにより大きなエネルギーを注ぐことができるように取り組んでいくことが大切である。



第4 分科会

「組織・運営に関する課題」

提
言

1

研究主題 地域との連携における教頭の役割

副 主 題 ー「自然環境を生かした学習」を通じた地域との持続可能な連携をめざす組織づくりー

協議の柱 地域との連携を持続可能なものにしていくために、教頭の役割はどうか

提 言 者 日田市立高瀬小学校 高島 哲史 (大分県)

指導助言者 豊見城市立座安小学校 校長 川満 恵昌

提
言

2

研究主題 児童生徒・教職員が輝く「働き方改革」の実現に向けた取組

副 主 題 ー教職員が「働き方改革」に継続的に向き合うためにはー

協議の柱 教職員が「働き方改革」に継続的に向き合うためにはどうあるべきか

提 言 者 伊万里市立伊万里中学校 森戸 恭介 (佐賀県)

指導助言者 鳥尻教育事務所 主任指導主事 勢理客 貴之

提
言

3

研究主題 新型コロナウイルス感染症に対する危機管理体制の確立に向けて

副 主 題 ー市内小学校における感染症対策の工夫・改善の取組を通してー

協議の柱 アフターコロナの学校経営について「コロナ禍で学んだことを今後の組織運営にどう活かすのか」

提 言 者 豊見城市立伊良波小学校 大浜 辰也 (沖縄県)

指導助言者 鳥尻教育事務所 主任指導主事 勢理客 貴之

第4分科会



分科会 第 4 教育福祉会館大ホール10:00~





第4分科会【提言1】 大分県 高瀬小 高島 哲史

I 質疑応答

Q1 育友会ではどのような活動や話し合いが行われているのか。

A1 役員会では学習や活動の下準備、役員の関わりが話の中心で、役員と学校で固めた後、育友会の運営委員会へ提案する。また、学校運営協議会の方に、協力依頼している。

Q2 育友会はPTAや保護者会とは別の組織なのか。

A1 PTAと大差はないが、就学家庭ではない地域の方も参加し、お金を出してもらっている。

Q3 地域の方の高齢化で活動が止まることがあると思うが、人材発掘をどのように行っているのか。

A1 学校運営協議会の方や育友会の会長に相談し探している。

Q4 作業日が休日となっているが、教員や教頭自身は回復日をどうしているのか。

A1 職員へは平日に早く帰れるようにしているが、教頭は難しい。

Q5 地域の方々には子供たちに教えることをどのように思っているのか。

A1 活動の様子から好きで活動している様子である。また、卒業生でもあるため、学校のことを大切に思っている様子である。

Q6 社会教育や公民館とのかかわりはあるのか。

A1 公民館自体の活動があるため連携できていない。

Q7 子供たちの活動への思いや変容は？

A1 学年ごとの活動を楽しみにしており、特に6年生の植樹について誇りに思っている。

Q8 子供会との連携は？

A1 子供会の活動は町内で保護者が行っており、学校はノータッチである。

II 研究協議 【グループ協議（抜粋）】

1 地域連携を担っているのは教頭だが、地域コーディネーターがいるともっと地域とのつながりが深くなりいろんな活動に取り組める。

休日の行事を減らし、平日に行うようにしないと持続可能な取組にはなりにくい。

高瀬小のような地域連携ガイドブックがあると、うまく引継ぎがいくのでよい。

2 小規模校では高瀬小学校と同じような取組があ

り、学校内で継続していくために地域連携ガイドブックの活用が非常に参考になった。

中規模・大規模校では主幹教諭等が地域コーディネーターを担当している学校もあり、担当者の働き方改革が課題となっている。

カリキュラムの中に地域連携活動を位置付けていく必要があり、そのためには教育委員会に地域コーディネーターを要請するように働きかけていく必要がある。市全体として地域連携を位置付けているところもある。行政と連携することで、担当が変わっても継続して取り組んでいる。

【全体協議】

1 熊本県のある中学校では、地域のイベントのリーダーを地域の方に任せているため、学校の負担が少ない。

2 休業日に出勤した場合は、学校として振替休日を設定している。



指導助言 1

《沖縄県豊見城市立座安小学校 校長 川満 恵昌》

日田市は、江戸末期の私塾「咸宜園」の考え（ことごとく宜し）が脈々と引き継がれており、教育に熱い思いや理解がある地域である。高瀬小は恵まれた地域資源を有効に活用し、地域の思いや教育力を生かした教育活動を長年続けており、感銘を受けた。

発達段階に応じ、各学年が自然環境を生かした学習や会合等に教頭としてすべてに参加し、教頭の真摯な姿勢が地域連携に大きく貢献していると感じた。

本研究において「地域ガイドブックの作成」や「地域部の新設」について今年度からの試みで成果や課題が取り上げられているが、効果が実感できるように今後の進化を期待したい。

持続可能な地域連携について3つの提案をしたい。

1つ目は、地域の協力の下行う行事を教科の計画に組み入れ授業として実施する。2つ目は、すべての

関係者が「子ども主体」の意識を共有した取組を行う。教頭と地域の方のやり取りにも子供が参加することで、平日の勤務時間内で実施できるのではないかと考える。3つ目は、「個人対個人」の関わりから「組織対組織」へ繋げていくことが大切である。4つ目は、人材育成についての質問があったが、学校だけでなく、地域の方々にももっと協力を求めているほうがよい。地域連携を持続可能にしていく3つの提案と、みなさんから出てきた人材育成についても合わせ、4つの提案をしたい。

みんなでいい取組を共有し、学校をいい方向に変えていけたらいいと思う。

第4分科会 【提言2】 佐賀県 伊万里中 森戸 恭介

I 質疑応答

Q1 中学校での部活動の地域移行にどう取り組んでいるのか。

A1 部活動をしない日を週に2日(水曜日と土曜日)設定している。教師も助かっている。地域移行は種目競技によると思っている。指導者がいないのが現状。

Q2 誕生日の年休取得の効果はどのようなものがあるのか。

A1 有田中学校の取り組みだが、年休の取得推進につながっていると感じている。

Q3 沖縄市は教育委員会が留守番電話を推進しているが、伊万里市の市町村教育委員会は推進していないのか。

A1 伊万里市の教育委員会は取り組んでいない。学校がNTTと協力して進めた。新しい電話機なら設置しやすいと思う。教育委員会はこれから取り組むと思う。

Q4 校時日課の変更で、午後に時間のゆとりを持つことに、職員の抵抗感はなかったのか。

A1 日課の8:00スタートには、職員からいろいろな声があったが個別に柔軟に対応を行っている。

II 研究協議 【グループ協議(抜粋)】

1 教頭業務の効率化を図るにはマンパワーの確保が必要と感じる。校時程の見直しも積極的に行っていきたい。働き方改革の理解を保護者や地域から得るためには行政の後押しも必要と感じる。校務を進

めるために通信、連絡ツールを活用した取り組みは必要。

2 職員に早く退勤を促しても、業務が残っているとの声もある。伊万里市で多くの取組を行っていることは心強い。勤務時間が8:00スタートは、これまでの朝の活動ができなくなる。やはり働き方改革はバランスよく行うのは難しいと感じた。保護者にメールで連絡するのはよいが、対面で話をする事も重要である。プライベートの充実が働き方改革には必要だが、どうして良いか分からない面もある。

【全体協議】

1 来年度の取り組みとして、伊万里市の小学校2校、中学校1校の校長間で話し合っていることだが、通知表の業務の軽減を図るため2学期制にすることを考えている。中学校は中間テスト・期末テストの廃止を検討している。これはクラスが多い学校では難しいことかもしれない。

2 働き方改革についていろいろな場所で話をしているが、話題になるのが、先生方の指導力や業務を遂行する能力や困った場面の対応力が課題ということ。「教頭先生どうしますか。」と無策で丸投げをしてくる先生が多い。係としてどうしたいのか。自分の意志や考えを持つことが大切。研修等で身に付けて欲しいし、実践で学んで欲しい。

3 学校現場で時間を創り出そうと頑張っても、コロナ後もとに戻っていることに疑問を感じている。行政の方で業務の線引きも必要ではないか。



指導助言 2

《沖縄県島尻教育事務所 主任指導主事 勢理客 貴之》

働き方改革を行う中で大切なのは、学校で児童生徒が笑顔であること、教師が授業を磨くこと。伊万里市の提言の良いところは、1年目の取組でもアンケートを取り、先生方に何が必要か聞きながら進め

ていることである。すでに校時表の見直しや出勤設定、有休設定を行っているが、特に業務改善委員会の設置は、すばらしい取組である。学校の中で業務改善委員会を設置し、そこから意見を出し学校を変えていく取組はすばらしいと思う。業務改善委員会の設置は、ややもすると学校は校長から教頭、教職員へと鍋蓋式に管理職が決めたことが伝わる事が多い。しかし、業務改善委員会の設置は教職員から教頭、校長へとボトムアップし、教育委員会にまで上げていくと、広がりが大きくなっていくとを感じる。

働き方改革の事例集が文部科学省から出ているので、参考にしてほしい。

また、もう1つの課題として出ている部活動については、当初は働き方改革の視点だったが、子どもの少子化対策の視点も盛り込まれてきている。目指す方向性は変わらない。

令和5・6・7年の3年間で周知（部活動の地域移行）をし、予算が伴うことから教育委員会と連携して進めていかないといけないということである。部活動は休養日を取りながら行っていくことが、働き方改革では大事である。

伊万里市の取組は、2年目に向けて働き方改革が進んでいく。私たちは伊万里市の好事例にプラスαとして進めていくため、各学校に業務改善委員会を設置してもらい、市町村の教育委員会の協力を仰ぎながら、教職員の自主性や自分事とした取組ができる委員会として、各学校働き方改革を進めて欲しいと思う。

第4分科会 【 提言3 】 沖縄県 伊良波小 大浜 辰也

I 質疑応答

Q1 ICTのスキルアップの話があったが、私の学校では思うように進んでいない面がある。市町村教育委員会のサポートの取組、研修等を教えて欲しい。

A1 豊見城市では週1回ICT支援員が来校する（月の初めにスケジュールが各学校に配付される）。その際にICT支援員から教えてもらっている。また、研修はオンライン研修が主流だったが、コロナが5類になってからは教職員がタブレットを（コロナ禍の時より）触らなくなってきたので、職員会議や職朝、終礼にタブレットを活用し、スキルアップを

図っている。

Q2 教頭のICT活用はどうか。

A2 市内の教頭会（月初めに行われる）で、各学校何ができるかの情報共有を行っている。私自身、ICTが得意なので、スキルアップの還元ができればと考えている。

II 研究協議 【グループ協議（抜粋）】

1 コロナ禍で学んだことを学校組織の運営にどう活かすのかということで話し合った。まず、行事で運動会はコロナ禍の中では午前中や半日開催を行った。これを継続することが話として出た。

ICTの活用がコロナ禍で進んだ3年間であった。いい意味でスキルが上がり授業で活用できた。また、不登校生徒の支援にICTを活用（リモート）した支援も行われ、引き続き継続したい。運動会の練習時間もできる範囲での取組にし、地域にも理解してもらい働き方改革につなげている。

2 学校行事や授業の目的やねらいを明確にしていることが、コロナ禍で行われたこと。ねらいや目的を達成していくために内容の精選や簡素化、効率化をしていく。運動会も簡素化することで、授業時数が増えたり、練習疲れの子どもがいなくなったりする効果がある。午前開催については地域の意見もあり、1日開催の学校もある。

ICTの活用は、デジタルとアナログのハイブリットで進めていかないといけない。教職員はデジタルでデータを共有できるし、研修も参集型の研修とオンライン・オンデマンドで行われ、移動時間の削減につながっている。また、若手教師の校内研修でICT活用について逆OJTもあり、若手教師が働き甲斐を感じている。

子どもたちに関しては、ICTの活用で授業に参加する姿勢が見られ、個別最適な学びが進んでいる。同時に、対面での学びがどの部分で必要か、協働的な学びをどう進めていくかという面で、授業改善につながる。

【全体協議】

1 アフターコロナの工夫改善として、GIGAスクールが進んでいるので、研修はICTを活用したオンライン研修でもよいのではないかと。PTA総会もオンラインによる総会でもよいのではないかと。

2 何を気にしていくかということ、思い切って自分の

学校のあるがままを保護者や地域に見てもらおう。運動会にしても、対外的にいい姿を見てもらおうという意識があるが、短時間でできたことを行い、その姿を見てもらってどう感じるかを地域に発信したらよいと思う。その上で意見をいただき、参考にすることがアフターコロナには必要だと感じる。

指導助言 3

《沖縄県島尻教育事務所 主任指導主事 勢理客 貴之》

コロナから4年たち、学校行事も簡素化、効率化が図られたと思う。新しい生活様式をふまえ、各学校何ができるかを模索しながら細かく対応してきたのが、豊見城市内の小中学校だったと思う。

では、それをふまえ、今後どうするのかという話だった。好事例として4つ挙げているが、今まで積み重ねてきたものを無くすのではなく継続していくところ、前向きにコロナ禍を過ごしてきたということを感じた。そもそも、コロナ禍で無くて影響がなかったものをコロナ以前に戻す必要があるのかということだが、そこは議論を重ねたうえで戻すのか、そのままいくのかは各学校でしっかり話し合うことだと思う。いろいろな意見を集約しながら、どこに進めば持続可能な勤務環境になるのか、どこに進めば子どもと向き合える環境になっていくのかについて考える機会にしてもらいたい。

これまで午前中開催だった運動会をまた午後に戻すかについても、話し合いの結果になる。必ずしも午前中開催が正解ではない。地域に応じた実情もあると思うし、学校、子どもの様子等、学校が抱える事情も違うと思うので話し合いで進めてもらいたい。

豊見城市の取組は、次に向かう話が多いと思う。これからの取組として、例えば、小学校で担任が休んだ時に困るという話があるが、例えば、教科担任制を導入してみる。中学校であればチーム担任制を入れてみる。これは働き方改革の事例集に載っている。

豊見城市は何校か教科担任制を行っているが、教科担任制をすることによって、複数の学級で同じ授業を繰り返していくことで授業の質がだんだん高まっていく効果があると聞いている。また、教科担任になるため、教材研究をする教科が少なくなるというメリットもあげられている。いろんな学級に入っ

ていくため、いろんな学級の子どもの様子も分かり、複数の教師がしっかりと一人の子について話ができ把握できるというメリットもあり、教科担任制を広めていく必要があると思う。

チーム担任制は小学校では厳しいと思うが、複数の学級プラス1名で担任を変えながらローテーションを組みながら行う事例も取り上げられている。このような取組も今後必要になってくると思う。

豊見城市は「ミライシード」の活用も進めているようだが、学習の記録が残りどこが落ち込んでいるのか等の把握ができるので記録をうまく利用し、その子に合った手立てを示していくことも必要である。

また、児童会生徒会主体の「楽しい学校づくり」「魅力ある学校づくり」についてあげているが、子ども達をうまく前面に出しながら楽しい雰囲気をつくっていくと、学校に来られない子供達を減らしていく方法の1つだと思う。児童会や生徒会をうまく活用しながら楽しく魅力ある学校作りに取り組んでいけたらと思う。

全体総括

《沖縄県島尻教育事務所 主任指導主事 勢理客 貴之》

業務改善を市町村教育委員会と連携して行うことが大切。学校単独で出すと「なぜ自分たちの校区だけ」という疑問が保護者から出てくることが考えられる。教育委員会単位で足並みを揃え「こういう取組を行う」というメッセージを発信することが大事。

そのために、教頭会、校長会で案を練って教育委員会にあげてほしい。伊万里市のように、学校の取組からあげていく方法もある。

先生方の力で働き方を変えながら、子供達の明るい未来と、若い職員をしっかり育てていけるような環境作りを行っていけたらと思う。



第5A
分科会

「教職員の専門性に関する課題」

提
言

1

研究主題 ミドルリーダーと連携した指導力の向上
副 主 題 ー子どもの目線にたった指導方法の検討を通してー
宿 議 の 柱 教員の指導力向上の取り組みについて、どのような工夫をしているか

提 言 者 福岡市立南当仁小学校 町田 隆久 (福岡県)

指導助言者 綾谷村立綾谷中学校 校長 與那覇 直樹

提
言

2

研究主題 コミュニティ・スクールの組織づくりと協力体制の構築

副 主 題 ー地域人材との連携・協働を目指してー

宿 議 の 柱 コミュニティ・スクールにおける教職員の参画意識の向上を図る取組のかかわり

提 言 者 宮崎市立加納中学校 奥野 英二 (宮崎県)

指導助言者 県教育庁義務教育課 主任指導主事 植前 秀一郎

提
言

3

研究主題 教職員の専門性を高めるための教頭の関わり

副 主 題 ー1人1台端末を活用した授業改善の取り組みを通してー

宿 議 の 柱 ICT端末を活用した授業改善について教員間の活用の差を埋める体制づくりをどのように行うべきか

提 言 者 名護市立久志小学校 知花 人 (沖縄県)

指導助言者 県教育庁義務教育課 主任指導主事 植前 秀一郎

第5A分科



分科会 第 5 A 自治会館 2 階ホール10:00～





第 5A 分科会 【 提言 1 】
福岡県 南当仁小 町田 隆久

I 質疑応答

Q1 ミドルリーダーを育てるにあたって、部会をどのように持つか、こういった時間帯で、話し合いを持っているか。

A1 本校では、毎週火曜日以外は、2 時間目の中休みのあとに、授業とは関係ないタブレットを使う時間が 20 分間ある。毎週火曜日は、この時間を無くして、2 時 5 分に下校としている。その後を持っている。

Q2 Q-U の対象学年は？

A1 1 年から 6 年まで実施している。Q-U には低学年用のものがある。

Q3 ベテランと若い先生が 2 極化していて、ミドルリーダーが非常に少ない。40 代、50 代の先生方の担任の割合は少ないが、どのようにベテランの先生と若い先生の融合資質向上を図っているか？

A1 年配は、2 名が学年主任をしている。学年主任は、他の校務分掌がない代わりに、他の先生のサポートをお願いし、繋がりがあるようにしている。若い先生は、ベテランの先生をリスペクト、ベテランの先生には若い先生のやることに文句を言わないようにすることを伝えている。

Q4 中学校の職員を経験してきた教頭が、小学校に入っているという強みを、清掃指導の他にも活かしたミドルリーダーの指導がありますか。

A1 生徒指導に関して担任が基本行うことを伝えつつ、できない場合には一緒に行うことを伝えたり、終礼時に、生徒指導の話をしたりしている。病休やその代替教員がこない場合には、自分の教科（理科）の授業に入ることをしている。

II 研究協議 【グループ協議（抜粋）】

1 掃除の仕方をビデオで撮り、校内で広める方法が、すごくいいやり方である。

2 Q-U の実施後、ちゃんと活用するということが、すごく大事な視点。全国学調の問題を取り上げるといっても、若手の先生方が自分の思い込みでやったりするところがあるので、すごく大事な視点と

考える。

3 先生方の指導力の向上については、学校によって実情（教員数、教科担任制、国語専科など）が違う。その中で、若手の先生に主任を持たせて先輩の先生方からアドバイスをもらい進めていく方法や、若手とベテランでペアを作って仕事を行なっていく方法などもあった。クラウド上で、先生方が毎週その情報交換を行なっている。例えば、ICT の活用方法について、情報をクラウド上にのせる。また、生徒指導の内容を「クラウド上で情報共有し、校長がコメントしたり、教頭に伝えたりして、早い段階で事実確認が終わり保護者へ指導する」という様な生徒指導の流れに変わってきている。

4 若手が多い学校とベテランが多い学校、大規模校と小規模校でも、課題が違う部分がある。指導力の向上のための時間の確保が話題になった。学校によっては、会議や研修の時間を区切って行なっていた。例えば、45 分の研修等の時間があつたら、30 分ぐらいが全体研修、残りの 15 分は外部で研修してきたことの情報共有を持つ。また、放課後の研修や部会、学年会の時間を持つために、週時程に最初に入れることを行なっている学校もあった。課題としては、全体共有や管理職との話をする時間をうまく取れないことがあがっていた。

【全体協議】 特になし

指導助言 1

《沖縄県読谷村立読谷中学校 校長 與那覇 直樹》

教頭は、児童の自由な発言やグループ学習を促す教室環境の整備を目指している。Q-U やグループワークトレーニングの研修や全国学力学習状況調査を教員に体験させて、教科の学習に活かす方法を行ってきている。

生徒指導部長や生徒指導担当は、清掃指導を通して、児童の清掃意識の改革に取り組んでいる。オリジナル動画を作成して清掃の仕方を教えたり、オンライン集会で評価や改善を行ったりしている。6 年生だけでなく全職員で取り組みながら、授業改善・指導力の向上に努めている。

ミドルリーダーと連携した資質の向上として、可能な限り学年の職員配置は、異年齢で構成する。ミドルリーダーに主任を任せて、ベテランの先生が担任

をすることで、ベテラン教員が若手の教員に保護者面談の方法や家庭訪問の方法を放課後に指導することができ、若手の職員の育成につながる。

この研究大会が、小中合同の教頭先生方が同じ場にいることに大きな意義を感じている。小学校の「卒業」は中学校への進学となる。これとは異なり、中学校の「卒業」は進学か就労の2つに分かれている。そのため、小学校の先生方と中学校の先生方の「卒業」の意識が全く違うと考える。9年間を見通した小中連携教育に繋がっていくことを期待する。

第5A分科会【提言2】 宮崎県 加納中 奥野 英二

I 質疑応答

Q1 学校運営協議会の構成員に、学校の教員は入っているのか。また、年間何回開催し地域コーディネーターはどのような人選で配置されているのか。

A1 以前は教務が入っていたが、今は入っていない状況のため、今後は全ての先生方に参画してもらおうと考えている。

A2 年間3～4回開催している学校が多い。

A3 地区でそれぞれあるが今、最もコーディネーターとして動きやすいところが町づくり協議会の方々である。地区の交流センターや公民館等でいろいろな社会教育をされているので、様々な人材が登録されている。そことのパイプ役としてつながることが大切である。

Q2 部会の構成員はどのようになっているのか。

A1 質問にある当該校の先生方がいないため、詳細をお答えすることができない。

II 研究協議 【グループ協議（抜粋）】

1 教職員の参画のために、コミュニティスクール活動の年間計画書を作り、その説明を最初の職員会議で行う。そうすることによって、実施時期になると校務分掌で関わりのある担当職員に、「これ一緒にやって」、「これお願い」というように声をかけやすくなり、関わりやすくなる。結果、教頭だけで対応するのではなく、教職員の参画を促すことに繋がっていく。

2 教職員には、校区探検の安全管理等もコミュニティスクールの一環であることを伝えることで、これまで学校が行ってきたことと大きく変わらないこと

を意識させることによってハードルを下げて参加しやすい雰囲気をつくることができる。

3 地域づくりをするには、やはり学校が必要で教頭が中心となることで負担感はあるが、学校と地域が話し合い、何かを実行したりする場と考えるとよい。地域や学校に対して熱い思いを持った方々がコミュニティスクールに関わっているのだから、地域の様子を知り地域からの要望を受けることで、学校の課題を伝え、地域へのお願いもできるようになり、より良い協力関係を築くことに繋がる。

4 今のところ、県や市町村によってコミュニティスクール実施の有無や取組に差があり、今後、組織体制づくりや協力体制、教職員の働き方改革も含めて話し合いを重ねていくことで、より良い方向へ進めていくことができると感じた。

【全体協議】

1 今後の取り組みの参考として「谷山ふるさとコミュニティ協議会」がある。ぜひ、今、スマホで検索してホームページを見て頂きたい。

（しばらくスマホでの検索タイムをとる）

この協議会には、学校以外にPTAや老人会等の各種団体も入っており、地域が非常に元気で様々なことを行ってくれる。地域コーディネーターを含めこの協議会の会長も学校運営協議会に入っており、学校と地域がとてもうまくいっている。

教職員の関わりとしては、それぞれの地域行事に関わる担当職員が出たり、年4回の学校運営協議会でも、生徒指導関係であれば生徒指導担当が話をするなど体制ができている。

指導助言 2

《沖縄県教育庁義務教育課 主任指導主事 植前秀一郎》

コミュニティスクールは、地域社会の意思をいかに反映させ維持していくかが趣旨としてある。その根底にあるのが学習指導要領に示された「社会に開かれた教育課程」であり、子ども達の未来を切り開く資質・能力を育てるため、地域と共に考えていくことである。

今回の研究において重要だったのは、1年目、2年目、3年目におけるそれぞれの成果と課題をまとめているところで、これは非常に参考になるもので

ある。まだ取組の進んでいない学校には、これからの見通しや課題が見えてくる研究になっている。

1年目は、まず学校経営方針の承認をいかにしてもらうか、2年目から本格的な組織作りを行い必要な機能について熟議する。これがキーワードで、最終的には地域が学校支援をしていくので、熟議することにより、学校教育目標をどう達成するかに関係ないといけない。3年目では、組織が段々固まるが、担当者の分掌上の位置づけや働き方改革等の課題が出てくる。その際に大切になることが、PDCAサイクルを回すことである。PDCAのCAを確実に行うことで、目的を再確認して形骸化を防ぎ、取組が継続可能な組織にしていくことが必要である。

コミュニティスクールでは、学校がなぜこのような教育課程を取り組んでいるのか、校長のビジョンが認められ、共有され、いかに人材の協力が得られるかが大切になってくる。そのサポートを行うのが教頭である。また、組織を立ち上げていく中でどうしても学校が中心になることがあるが、まずは学校中心からスタートし、地域と協力しながら、徐々に移行していくことが大事である。

第5A分科会【提言3】

沖縄県 久志小 知花 人

I 質疑応答

Q1 近隣校との交流で良さの共有や県外の小学校と交流を行ったとのことだが、どのように行ったのか教えてほしい。

A1 本日は各小学校の事例を発表させて頂いているが、本校の事例としては、近隣校との交流に関して社会科で行っており、Zoomを用いて実施している。また、県外との交流については、沖縄県から石川県に異動された教諭がおり、元同僚の教諭同士で行った。市内の他校の取組についてもいろいろありますのでグループ協議や全体協議の場で情報共有して頂きたい。

Q2 個別最適な学びの指導方法を校内で共有し、日常化させることに教頭の関わるシステムが必要とのことだが、具体的に教えて頂きたい。

A1 今回の例でいうと、教頭会で作成した資料にある構想案を先生方に説明し、個別最適な学びのトライとしてどういうことが考えられるか。例えば、「指

導の個別化というのはこういうもので、学習の個性化や成果はこういうものである。」ということを校内研主任と一緒に、校内研修を通して先生方に周知して頂くということです。

A2 それから授業改善にも繋がるが、普段の授業参観や校内研修授業参観の際に、端末の活用について必ず指導助言を行うことで、先生方に意識を持たせることも取り組んでいる。

Q3 市全体の中で進めていく上で非常に重要になるのが、授業支援ソフトで何を活用し、アプリで何をとり入れていくのかと思うが、無料ではなく有料の授業支援ソフトを使った実践があれば教えて頂きたい。加えて有料プランに関しては、受益者である児童がその金額を負担するのか、学校予算等の中で予算を組んでいるのかも教えてほしい。

A1 自分の知る範囲での返答になるがeライブラリに関しては、名護市教育委員会で導入して市内の全学校で使用している。その他の有料ソフトに関しては、学校独自で導入しているとは聞いたことがあるが、詳細は把握していない。

II 研究協議 【グループ協議（抜粋）】

1 R2から端末配布があり、R3から活用している。教諭間の格差を埋めるため、得意な先生に使ってもらい、その活用方法を共有してできる先生を増やすようにしている。しかし、学校に活用しに長けた先生がいない場合は、管理職でリーダーシップをとるようにしている。

2 児童生徒の端末の持ち帰りについては、家庭でどのように使ってもらうのか、その取り組みが十分でないため、今後の課題である。

3 先ほどからも出ているが、若い先生方は非常に活用して使っているが、ベテランの先生方があまり使用していないという実態がある。その対策として4月に市教育委員会の方から職員へ、活用に係るシートが示され、こちらで何をを使うのか、どういう観点で使うのか、年度初めの段階で先生方に意識してもらい、スタートラインをそろえて授業ができるよう周知している学校もある。

4 活用の差をなくす別の取組として、教頭が「この先生には、この先生の導入の場面を見せたいな。端末の場面の動画を見せたいな。」と職員の状況に合わせて率先して直接声かけし、それぞれの職員と一緒に

に授業を見に行っているという学校もある。他にもミニ研修等でジャムボードやロイロノートなどを用いて、職員全員で体験し遊ぶことを通したり、職員会議などで活用したり普段使いをすることで抵抗感を下げ、授業での使用を促す取組もある。

【全体協議】

1 先生方の活用の差を縮めるためには、やはり子供たちが活用する場面を設定する必要がある。鹿児島県南九州市立九玉小学校では、小規模校ということもあり、児童の表現力育成のためロイロノートを活用している。方法としては、近隣地区各校の教頭が輪番で出す新聞のコラムに対し感想(100文字以内、授業以外の取組)を6年児童が打ち込み、それを全員で共有することで、校内にしながら多様な考えに触れることで、自分の考えを広げることにも活用している。

指導助言 3

《沖縄県教育庁義務教育課 主任指導主事 植前秀一郎》

ICTの活用としては、授業と家庭学習の往還を進めていただきたい。授業改善、学習改善等を進める上では、一人一台端末を使うことが必須である。授業の中で使うことも大切だが、家庭学習の取組を授業とどう繋げていくかが、今後必要になり大事なところになる。我々が目指しているのは、自立した学習者の育成であり、そのためには自分で計画を立てて、家庭学習を行わなければならない。授業で学んだ内容を家でもやる。要は、授業の続きを家でやるような形で、それをまた学校に持ってくる。そして、その続きを授業の中で行う。場合によっては端末を使ってインターネット、クラウドを活用して、家にいながら友達と共同作業して学べるのが、ICT機器を使うことで可能になると考えられる。

そのために、まず最初に、教員間のICT機器活用の差を埋める体制づくりが必要になってくる。この研究において具体的な例は多く公開されており、非常に参考になる。ベテランは、多くの教育実践を積み重ねており、そのノウハウをたくさん持っている。逆に若手はICT機器を使う能力、技術は持っているが、教育実践を積み重ねていないので、ICT機器をどう使っているかわからない。それなら2人を組み合わせる方法が最良となる。

コミュニティスクールの議論でもありましたが、お

互いWin-Winの関係は教師同士も必要で、ベテランの先生の自己有用感を高めていく工夫が必要である。その声掛け等、職員をうまく回す中立ちになるのが教頭の役割になる。

今回のこの研究の成果と課題をもとに、効果的な端末活用方法や教員間の活用格差を埋めていく方法をいろいろと模索して頂きたい。

全体総括

《沖縄県教育庁義務教育課 主任指導主事 植前秀一郎》

今回、3名の先生方には、お忙しい中、研究を進めていかれ、さらに文章にまとめアウトプットとしての提言を頂き、それを小中の先生方が一緒に協議することで、本当に充実した分科会となっている。テーマは、「教職員の専門性をいかに高めるか」ということだが、結局、専門性を高めていくのは研修しかないと言える。「学び続ける教職員」であるためにまだまだそういうことがうまくできない若手教職員に、学び続けるモデルを見せていくこともベテラン教職員や管理職の仕事の一つとなる。また、自立した学習者の育成のためにも、子供達に先生方の学ぶ姿勢も見せる必要がある。個別最適解を求めると同時に、共同で最適解を探す作業を常に行うことが、今後、我々教職員にとっても必要なことで、教頭、校長にとってはそれを教職員に促し研修を重視していく、そういう雰囲気をつくるのが非常に大事なことと思われる。

また研修となると、よく外部から講師を招聘することが多いが、校内の教職員である特定分野の知識を持つ、内在的資源にも目を向け、活用することも必要である。教頭として校長と共にその内在資源を探す仕事も重要な職務となるので頑張ってほしい。



第5B
分科会

「教職員の専門性に関する課題」

提
言

1

研究主題 喜界島のよさを生かした信頼される学校づくり
をめざして

副 主 題 -学校・地域の特色を生かした教職員の資質向上の取組-

審 議 の 柱 教職員の指導力や資質を向上させるための教頭のかかわりについて

提 言 者 喜界町立早町小学校 奥蘭 隆一 (鹿児島県)

指導助言者 那覇市立古蔵中学校 校長 新地 康秀

提
言

2

研究主題 全職員が一人一台端末を使用できるようにする
ための教頭としての関わり

副 主 題 -GIGA スクール構想の実現を目指して-

審 議 の 柱 学び続ける教師集団を育成するための副校長・教頭としての役割

提 言 者 佐世保市立柏木中学校 猪 晃一郎 (長崎県)

指導助言者 那覇教育事務所 主任指導主事 上里 亮

提
言

3

研究主題 教員の指導力向上を支える教頭の関わり

副 主 題 -学校の特性と教員の構成に合わせた支援の工夫-

審 議 の 柱 校内OJTの構築を図るために教頭としてどのように関わっていくか

提 言 者 竹富町立西表小中学校 大嶺 千秋 (沖縄県)

指導助言者 那覇教育事務所 主任指導主事 上里 亮



分科会 第 5 B 青年会館2階大ホール10:00～





第5B分科会
教職員の専門性に関する



第 5B 分科会 【 提言 1 】

鹿児島県 早町小 奥蘭 隆一

I 質疑応答

Q1 研究のねらい(1)の各学校の課題共有をどのように行っているか。

A1 喜界町内小中学校の小中教科研究会へ職員が各分科会へ参加し、意見交換の中で課題を共有している。また、年3回の町内教頭研究会で各学校の課題や取組状況等の意見交換を行い情報共有している。

Q2 研究成果の課題意識をもち、主体的に研修に参加する職員が増えたとあるが、具体的にはどのように職員の姿が変化したのか。

A1 はっきりとした姿の変化はないが、学校職員評価で、職員の意識向上が昨年度の3.0から今年度3.3に変化したことから主体的に研修に参加していることが伺える。

Q3 人口の減少が離島の課題である中、特色ある学校づくりをしていく中で、現在または将来的に若者は喜界島に戻ってきているのか。

A1 喜界島には、2小1中、県立高校の1校があるが、小学校の子供達に将来の夢を書かせているが、「島で農業がやりたい」「漁業やりたい」など内容が増えてきている。一朝一夕に改善することはできないが、学校が地域の特色を生かしながら経験・体験させていくことで島の良さを感じ取る子どもが増えれば、島に戻る若者が今後出てくるのではないかと考えている。難しい課題ではあるが、キャリア教育を継続していくことが大切である。

II 研究協議 【グループ協議(抜粋)】

1 地域の特色を生かした体験活動は、メタ認知を高め学力向上につながる。コロナ前は様々な体験活動を行っていたが、コロナ禍で停止した活動を再開するにあたり、地域人材の活用等、地域との連携強化を進めていく必要がある。そのため、教頭は学校のキーパーソンとして地域と積極的にかかわっていくことが重要である。

3 教職員は、学級経営・教材研究に重点を置くため地域の状況に対し情報量が少ないため、管理職が地域との繋がりを意識しながらアンテナをはり、様々な情報を取り入れ、学校職員へ提供している。

地域の方に週1回「読み聞かせ」への参加や学校評議員委嘱など学校変革進めている。



【全体協議】

- 1 離島へき地勤務の若手職員に地域とのかかわり方を経験させるためにも必要な交流機会を設定することが教頭の役割。
- 2 学校運営において、主任会(企画委員会)の意見を取り入れ、反映させることで教職員の主体的な参画意識を高めることができる。
- 3 小小連携や小中連携の強化や共通実践事項を整えることは、互いに刺激を受け授業力向上に繋がる取組である。

指導助言 1

《沖縄県那覇市立古蔵中学校 校長 新地 康秀》

学校教育に求められていることは、「問い」をもち、主体的に学ぶ授業を推進し、「自学自習力」の育成を図り、ICTを積極的に活用しながら、自立した学習者を育成することである。喜界町の3小中学校の取組は、それらの方向性と一致した取組だといえる。

【学力向上を図る取組】について、(1)職員研修を充実させるポイントとして、学校・学級の課題に即した授業参観の視点をそろえること。それを互いにフィードバックする場・時間を設定すること。(2)発展的・補充的指導の実践事例として①リトルティーチャー体制の充実②カリキュラムマネジメント(地域の実情と児童生徒の実態に合わせた教育課程の編成)、(3)一人一授業実施の際は、授業者と参観者の視点を揃えることが重要で、その例として、「実生活と関りを示したか」「考えさせる時間を確保したか」「相互交流・主体的活動の時間を確保したか」「成長を見取る場面はどこか」「家庭学習に繋がるような振り返りがあったか」などがあげられる。

【地域の特色を生かした教育活動の取組】について喜界島の取組は、他県の先生方にとっても参考に

なる取組だったといえる。ポイントは、地域のよさを知り、中学校・高等学校進学後、島に戻りたいと思える取組(郷土教育)を充実させることである。

【教職員の資質向上に資する取組】については、小中の全職員で学力向上や生徒指導、特別支援教育、児童生徒会活動等の各部会を設置し、9年間を見通して育てたい子供像を共有して取り組むことで大きな成果を生む。学びの連続性を意識してぜひ小中合同で研修の充実を図っていただきたい。

それぞれの取組において教頭としての関わりは、職員に「やりっぱなし・させっぱなし」にさせず、職員の頑張りを見取り、フィードバックを確実に行うことが必要である。忙しい中においても学校現場では①児童生徒・保護者・地域の実態把握を行い、課題を明確化する。②家庭教育・児童生徒の円滑な支援に向けて、校内支援体制の整備を行う。③小中の円滑な連携のため、ネットワークを構築し、学校・地域・関係機関がスムーズに連携するための情報交換に繋げる。その際は、個人情報の取り扱いには十分に留意する。④地域人材を活用しての体験活動においては地域との連携の窓口となる。⑤外部(地域)との打ち合わせ等では、学校・家庭・地域との連絡調整役となる。⑥研究主任や諸行事担当への指導助言を行う。等が必要である。

最後に「魅力ある学校づくり」に向けて、教頭の関わりとして①授業が分かる、楽しい②児童生徒が主体的に活動できる③児童生徒が将来に夢や希望をもち続ける等の視点を持ちながら校長との確認の下、カリキュラムマネジメントを作成していくことが求められる。

各学校において①支持的風土の醸成、②自治意識の醸成、③生徒指導4つのポイントを生かした毎時間の授業実践に取り組み①児童・生徒、②教職員、③保護者・地域の三者にとって「魅力ある学校づくり」の構築に尽力していただきたい。

第58分科会 【 提言2 】 長崎県 柚木中 猪 晃一郎

I 質疑応答

Q1 一人一台端末を家庭へ持ち帰りを行った際、学習以外のことで利用して困ることが課題として挙げられていたが、どのような対策を講じているか。利用時間の制限はあるか。

A1 学習に相応しくないとされるサイトへのアクセスや検索ワード入力があれば、教育委員会が行うフィルタリングで制約または、チェックされユーザーを特定し学校へ報告され、児童生徒への指導にかされるようになっているが、利用時間の設定は行われていない。また、教育委員会で利用時間の設定を行うことも困難な状況にあり、検討が必要とのこと。現段階では、各家庭で利用時間を決め、Wi-Fiを切ってもらうなどの対応を依頼しているところである。

Q2 生徒の変容として、県学力調査が向上したことが成果として挙げられているが、GIGAスクール構想で一人一台端末が導入されたことが要因であるという見解ですか。

A1 生徒の学力向上は、GIGAスクール構想の端末使用と直結しているとは考えていない。全職員が授業を相互に見合う校内研修体制の確立により、授業指導力の向上が学習内容の定着に繋がったものだと考えている。



II 研究協議 【グループ協議(抜粋)】

1 地方自治体によって、家庭への持ち帰りや活用頻度・研修の実施等、タブレット活用に温度差があるが、利便性を把握しながら授業での活用を推進していくことが必要である。例えば、書くことが苦手な児童に対して端末を活用することで学びを深めることができた。家庭科の家庭学習で調理実習したことを家庭での実践に繋げ、映像で提出させるなど、各教科の授業と連動させた家庭学習の充実を端末を活用して行っている。また、GIGAサポーターが校内に常駐しており、授業へ活用する際の教師の困り感への支援体制がありGIGAスクール構想が推進している。

2 GIGAスクール構想が進まない学校に関しては教頭主導で研修会を計画することも必要である。その際、短時間で楽しく・活用してみたくなる・具体

例を明確にした研修を計画することも必要である。

【全体協議】

1 教職2年目3年目の若手教師が放課後、ミニ研修という形で10～15分程度で様々なICT活用の実践事例を紹介する取組がある。参加したベテラン教師から「便利だ。授業に使える。」など、活用に積極性が生じた。若手教師も講師になることでやりがいを感じることで自信になり、主体的に研修に参加するだけでなく、情報教育主任へ研修内容を提案するなど教師の資質向上に繋がる。

指導助言 2

《沖縄県那覇教育事務所 主任指導主事 上里 亮》

発表では、教員に負担感を与えないことを意識して取り組んでいることが印象的だった。また、先生方の主体性が失われないよう3年計画での取り組みは非常に良かった。

はじめに、多様な子供達を誰一人取り残さず個別最適化された学びを持続的に実現することがGIGAスクール構想の主な目的である。そのために一人一人の個性や置かれた状況に「公正に個別最適化された学び」を進めていくことが重要である。GIGAスクール構想の4つのメリット①一人一人状況に合わせた一斉授業では実現できなかったきめ細かい教育を提供できる。②学習者の能動的な学びの提供ができる。③プログラミングへの興味を引出せる。④業務の負担軽減に繋がる。さらに期待できる3つの学習方略「個別学習」「情報共有」「協働学習」で多様な資質能力の向上に繋がる。以上を理解して推進していきたい。

これからの研究推進において、活用方法を学ぶことではなく、教員の指導力向上に視点を置き、担当者だけでなく学校全体で可視化できる研修体制を構築することが重要となる。情報モラルについては「デジタル・シティズンシップ教育」の動画教材等を活用し子供達が、自ら考え、正しく判断して行動できるよう新しい価値観に適応した教育の推進が求められている。

第5B分科会【提言3】

沖縄県 西表小中 大嶺 千秋

I 質疑応答

Q1 年代別負担感の調査結果の中で、「タブレット

の活用」に対する負担感が50代の次に20代の負担感が4割を占めている。ICT機器の活用能力の高い若手に業務を依頼する傾向があることが負担感に繋がっている面はないか。また、負担感軽減に向けて、教頭としてどのように働きかけていくか。

A1 若手に関しては、ICTの活用に長けているからこそ、もっと効率的・効果的に授業で活用できないかという悩みかと考えている。教頭としての働きかけとしては、できていることを認め、褒め、必要とされていることを伝えることで若手を伸ばしていきたい。また、悩んでいることがあれば、他の実践例を紹介する等研修の情報提供をした。

II 研究協議 【グループ協議(抜粋)】

1 教科部会を週時程に明記し、技能教科教諭同士での教材研究、学年の教師全員でローテーション授業を実施し、業務の負担軽減を図っている。

【全体協議】

1 若手教員の成長やベテラン先生方のICTへの苦手意識克服のために教頭の役割はとても大きい。また、教頭だけが支援の必要な学級に入るには限度があるため、1学年1学級の小規模校では、複数担任制を導入することでお互いのデメリット補い、よい効果が生まれている。



指導助言 3

《沖縄県那覇教育事務所 主任指導主事 上里 亮》

管理職は、絶えず変化する社会と学校に求められる役割を的確に捉え、個々の教師の能力・適性等を把握し、教師集団の総合力を最大化させられるよう学校組織マネジメントを行い、研修推進体制を整備する必要がある。教頭は、全国や県の教育施策の現状や課題を把握し、校長の学校運営マネジメントを推進する役割があることから教職員の指導力向上についてはリーダーシップが必要である。

Q1 年代別負担感の調査結果の中で、「タブレット

1 教科指導について、授業参観の際に県や市町村で

共通したシート(導入の工夫・思考のポイント提示・交流時の視点とファシリテート力・めあてと連動したまとめ・振り返りの視点)を活用し先生方へ助言を行うことが指導力向上の第一歩である。

次に校内 OJT 実施の際、3原則「意図的(目的・ねらいを明確に)」「計画的(見通しと位置づけを明確に)」「継続的(繰り返し・反復的に)」と4段階「Show(やってみせる)」「Tell(説明する)」「Do(させてみる)」「Check(評価・追加指導)」の視点を意識することで、人材育成に繋がる。しかし、校内 OJT をシステム化しても主体性がなく、先輩教師からの圧が強いと効果が半減するので、教頭は職員室を居心地よく気楽に話せる空間づくり・土壌づくりが教員育成の前提であることを念頭に教員の資質向上に努めて欲しい。

全体総括

《沖縄県那覇教育事務所 主任指導主事 上里 亮》

これからの学校の方向性として、子供たちがウェルビーイング (well-being) を実現していくためには、自ら主体的に目標を設定して、振り返りながら責任ある行動がとれる力を身に付けることが必要である。教職員の育成についても画一的な教員像を求めるのは避け、生涯にわたり資質・能力の向上を図るという前提に立って、全職員に共通に求められる基礎的・基本的な資質・能力を確保し、積極的に独自の得意分野作り、個性の伸長を図っていくことが大事である。

文部科学省は、2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として、「教師が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている」ことを教職員の姿として挙げている。本分科会における提言は、どの実践も今後の方向性を示す内容になっていた。教職員集団としての力を十分に発揮するためには、学校管理職の役割は一層重要となる。従前より求められている教育者としての資質能力や的確な判断力、決断力、交渉力、危機管理等のマネジメント能力に加えて、令和の日本型学校教育においては、特

に様々なデータや学校におかれた内外環境に関する情報について、収集、整理、分析して共有するアセスメント力、そして学校内外の関係者の相互作用により学校の教育力を最大化していくファシリテーション力が求められている。また、学校管理職のマネジメントについても学校で働く人材の多様性が進む中で、質的な転換が求められている。教職員の意見を積極的に取り入れ、互いの強みを生かす組織づくり、教員同士の学び合いを促進する風土の醸成、教師が安心して職能開発できる環境、多様な背景、経験、専門性等を有する人材が連携協働する体制の構築が必要である。

教師の持続的な成長を支える環境は、職場における心理的安全性が確保されつつ、多様な教職員同士の関わり合いを軸に学校が直面する教育課題を克服する、それぞれの教師が「経験を振り返ることを基礎とした学び」と「他者との対話から得られる学び」を蓄積することが大事だとされている。教職員集団を多様にしただけでレジデンスが強化されるわけではなく、学校管理職のリーダーシップの下で目標の明確化、心理的安全性の確保、教職員の経歴・背景の多様性を考慮したマネジメントが不可欠である。特に心理的安全性の確保は、様々な課題に対応できる質の高い教職員集団を形成するために不可欠である。今回の報告でも心理的安全性を持った職員の学びを高める関係性で以って実践されていた。

働き方改革を通じて学校全体が抱える業務量を見直し、安心安全な勤務環境を実現するだけでなく、萎縮せずに意見を述べたり、前例や実績のない試みに挑戦する教師を支援する環境を醸成したりすることが私たち管理職には求められる。先生方が生き生きと、輝かなければ子供たちを輝かすことはできない。

最後に、「教職員の専門性に関する課題」について、教職員に求められていることは多岐にわたり、どこから手を付けていくのか判断に迷う点もあるかと思うが、学校教育目標、学校長の学校運営のグランドデザイン、子供目線に立った学校課題、職員の困り感を整理するなど立ち返って、教職員の資質向上に向けた取組を一步一步、着実に推進して欲しい。



第63回 九州地区公立学校教頭会研究大会
第57回 沖縄県公立小中学校教頭研究大会

期 日：令和5年8月18日（金）

会 場：那覇市 那覇文化芸術劇場なは一と 大劇場

開会行事 9：45～10：15（30分）

- | | | | |
|---|-------------|-------------|------|
| 1 | 開会のことば | 実行副委員長 | 松田健 |
| 2 | 国歌斉唱 | 伴奏 | CD |
| 3 | あいさつ | 大会実行委員長 | 知念英也 |
| | | 全国公立学校教頭会会長 | 吉原勇 |
| 4 | 祝辞 | 那覇市長 | 知念覚 |
| | | 沖縄県教育委員会教育長 | 半嶺満 |
| 5 | 来賓紹介 | 実行副委員長 | 内山直美 |
| 6 | 祝電披露 | 実行副委員長 | 内山直美 |
| 7 | 感謝状贈呈 | 受賞者：前九公教会長 | 永田大作 |
| | 授与者：大会実行委員長 | | 知念英也 |
| 8 | 閉会のことば | 実行副委員長 | 松田健 |

記念講演 10：30～12：10（100分）

- | | | | |
|---|------|---------|------|
| 1 | 講師紹介 | 大会実行委員長 | 知念英也 |
|---|------|---------|------|

演題：「メタバース空間上のBody Sharing」

講師：玉城 絵美氏（H2L,Inc.,CEO / 琉球大学工学部教授）

- | | | | |
|---|------|--------|------|
| 2 | 謝辞 | 実行副委員長 | 内山直美 |
| 3 | 花束贈呈 | 実行副委員長 | 吉田知子 |

閉会行事 12：20～12：45（25分）

- | | | | |
|---|-------------|--------|-------|
| 1 | 開会のことば | 実行副委員長 | 内山直美 |
| 2 | 次期開催県会長あいさつ | 宮崎県会長 | 小出水公宏 |
| 3 | 大会宣言 | 大会研究部長 | 渡慶次憲雄 |
| 4 | 万歳三唱 | 熊本県会長 | 福田信一郎 |
| 5 | 閉会のことば | 実行副委員長 | 松田健 |

全体会・開会行事 8/18(金) 9:45～



9:00 全体会 開場 なは一と1階 ロビー



9:10 全体会受付開始 県外会員受付場所 なは一と2階



9:45 全体会 開会行事 なは一と2階 大劇場 壇上



実行委員長あいさつ 沖縄県会長 知念英也



あいさつ 全国公立学校教頭会会長 吉原 勇



祝辞 那覇市長 知念 覚 様



祝辞 沖縄県教育委員会教育長 半嶺 満 様(代理)



来賓紹介・祝電披露 実行副委員長 内山 直美



感謝状贈呈 受賞者 前九公教会長 永田 大作 様(代理)



8.18.金 全体会 会員実参加者数 870名 なは一と大劇場



閉会のことば 実行副委員長 松田 健



8.18.金 全体会会場 なは一と大劇場

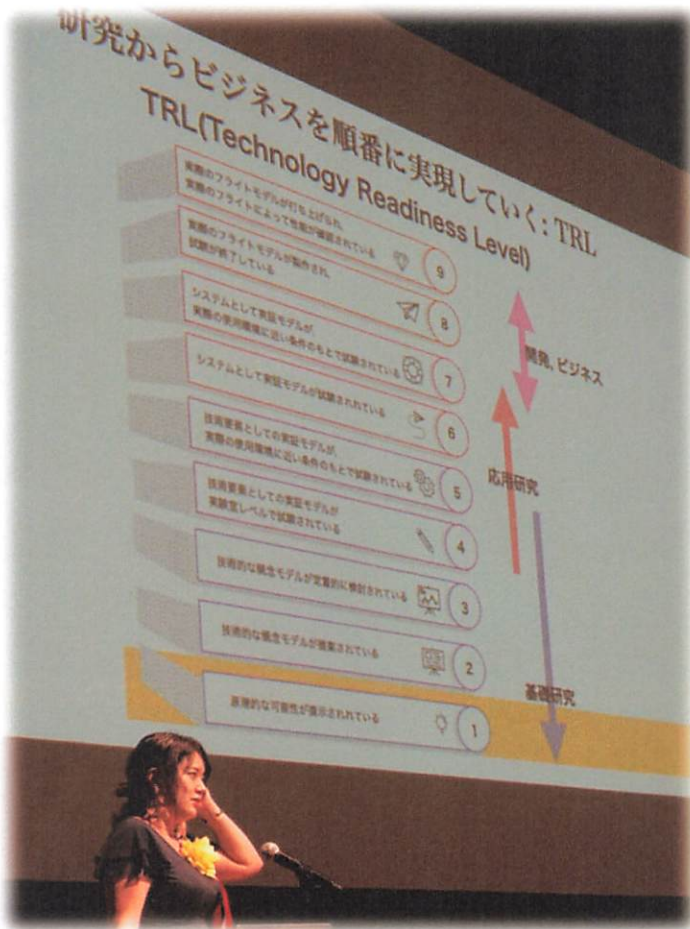
全体会・記念講演 8/18(金) 10:30~



8,18,金 記念講演

演題:「メタバース空間上の BodySharing」

講師:玉城 絵美氏 H2L,Inc.,CEO/琉球大学工学部教授



記念講演謝辞 大会実行副委員長 内山 直美

第63回 九州地区公立学校教頭会研究大会2日目 「全体会」

記念講演

演 題:「メタバース空間上のBodysharing」

講 師:玉城 絵美 氏 (H2L, Inc., CEO/琉球大学工学部教授)

皆さん、こんにちは。御紹介ありがとうございます、玉城と申します。

今日は、BodySharing、体験共有の未来ということですが、皆様、普段は教育されている方々だと思います。私が教えているところは琉球大学と兼任して東京大学で教授をさせてもらいながら、たまに早稲田大学などいろいろな大学で教えております。

その中で、大学生たちが就職していろいろな感じていることを追跡調査をしていて、こういう教育は今後必要になるという、そういうことも踏まえて、かつこれから未来がどうなっていくか、科学技術の面でもお話していきたいと思っております。

先ほどすばらしい内容で御紹介していただいたとおり、私はHCI(ヒューマンコンピュータ・インタラクション)、ヒューマンインターフェースという研究をしています。

皆さんがお手持ちのスマートフォンのタッチパネルの部分や普段使われているマウスやキーボード、ディスプレイ、マイク、スピーカー、そういうユーザーとコンピュータの間の情報交換をする部分、コミュニケーションをする部分の研究をしていますので、人間のことに少し詳しいですし、コンピュータのことに詳しいです。ちょうど間のところです。

もしかしたら、普段、研究者としてではなくて、会社の経営者として、もしくはテレビ番組のABEMAヒルズとかシューイチのコメンテーターとして御覧になったことがある方もいるかもしれませんが。そこでは主に食レポばかりしていますけれども、普段はご飯を食べるだけではなくて研究をしています。あとは家で文鳥を飼っています。自己紹介はそれぐらいです。

今日、すごく大切に思っていること、これからの我々でもありますし、子どもたちもそうですし、いかに体験をしていくかということが重要になってきます。体験を得ながら未来をどうつくっていくのか、未来をどう予測していくのかということにまずフォーカスしてみたいと思っております。

先ほどお話ししたマウスやキーボード、ディスプレイ、タッチパネルなどそういったユーザーインターフェースの研修者ですごく有名な方に、アラン・ケイという研究者がいます。この方は、ダイナブックという概念やマウス、ディスプレイ上のユーザーインターフェース、GUI(グラフィカル・ユーザー・インターフェース)と呼ばれる、皆さんがマウスでディスプレイして、昔はコマンドでたたいてコンピュータを操作していたのですが、今はグラフィカルに使えるようになっていきますよね。そういったグラフィカル・ユーザー・インターフェースのすごく有名な研究者のアラン・ケイが残した言葉があります。「未来を予測する最善の方法は、未来を発明すること」と言っています。残した言葉とありますが、まだまだアラン・ケイさんは生きていて、今ギタリストをしているのですが、これはすごく重要なこととして、大学教員として、結構未来をよく聞かれるんです。未来はどうなっていくますかと、就職した先の子供たちはどうやって生きてますかと聞かれるのですけれども、そういうときにそれぞれの教育によって、教育とか御自身の生徒さん、学生さんたちのキャリア形成によって未来は発明できるものだと思います。

ちなみに、私自身は、部屋の中にながら外に出ずにコンピュータ経由、ロボットやホログラムで、バーチャルリアリティー空間上で生活していこうとしていて、普段ほとんどバーチャルリアリティー空間内で生活しています。琉球大学にはちょいちょいいますが、普段はバーチャルリアリティーの中にいるので、東京大学は教授をしているんですけども一度も行ったことがないです。学生のころは行っていたのですが、今となっては行かずに教えたり研究したりしています。

こういうふうにマルチスレッドで、部屋の中において、人生の3倍体験をしようと思っております。

この未来を実現するために、私の場合は、高校生の頃にひきこもりた、あまり外に出たくないと思って、普段あまり外に出ていないです。たまにこうやって講演会とか、テレビに出るときにすごく頑張っってここに来ているんです。今日も道に迷いながら頑張っって来ました。私の場合は子どものころ

から外に出たくなくて、ひきこもりたい、嫌だなどと思って、でも私が高校のころはひきこもりなんてとんでもない時代でした、ではどうやって未来をつくっていくだろうというのを一生懸命考えて、部屋の中にいたいけれども外とも交流したいし、充実した生活を送りたい。

外部と交流したくなるから、ロボットとか代理の友だちとかに外に出てもらおうかなとテレビ電話でやってみたんです。テレビ電話で友達に代わりにバーベキューに行ってもらったら、そういうときは嫉妬しかないです。皆さんもやってみてください。すごく嫉妬します。家族ぐるみでみんなでバーベキューに行くけど、自分だけ家の中にいるから代わりにテレビ電話でやってくださいと言ったらすごい気持ちになります。みんなすごく楽しそうなんです。なぜかと考えると、能動的な動作ではないからです。自分で肉を焼いたりもできないし、よそったり飲んだりもできないし、特に手の動作が伝えられないということで断念しようかと思ったんですけども、そのときに科学技術でどうにかしたらいいんじゃないかと。大学に入った後に大学教員の皆さんと話をし、どうやってこの夢を実現するのかというのを、計画的にひきこもるためにはどうしたらいいかすごくディスカッションしました。その結果、情報科学で手の情報を伝えて、部屋の中にいながら遠隔地、いろんなところに行きましょう、いろんな体験をしましょうと。さらには、発明した、開発した技術を徐々に社会的にも普及させていきたいと思います。どの段階で、何年にどういうふうに普及させようかというものを、学部生から修士の間ずっとディスカッションしながら2029年までの計画を練りました。今のところオンタイムで進んでおります。

夢を実現するということに、進路に合わないからと思うこともあったりするのですけれども、私が指導している学生たちに、かなり無茶なことであってもどう実現するのかということを実際に考えて、1時間でも30分でも向き合うということはすごく大切なんだと、自分自身も学生のころに体験して、今も一緒にやりながら進行しています。学生さんはとんでもない夢があったりするんです。

一番分かりやすくありがたいのは、「何か大きいことをしてお金持ちになりたい」と言う人がいます。それはすごく簡単なので一緒に考えて、では大きいこととはなんだろうというふうに話をし、お金持ち、では金融関係に行きましょうか、投資家になりましょう、資本家になりましょうかみたいな。それはお金持ちになりますからね。そういう話をし、徐々に実現していくことをやっています。

私の場合はひきこもりたかったのですが、かなり明確に体験設計をしながらひきこもるという方法を考えたんです。こういうふうに明確になった欲というものは実現します。

とはいえ、そんな高い確率で実現しないだろうと思うかもしれないので、ちょっと検証してみたいと思います。

明確になった欲は実現するのか。特にとんでもない欲望であったら実現するのかというのをちょっと見たいと思います。

サイエンスフィクションというのは、とんでもない欲望のかたまりです。もう無理だろうという内容ですね。でも明確になった欲望の一つなので、50年以上前のSFを見てみたいと思います。

これはSF好きの人は絶対に知っている作家だと思います。アイザック・アシモフさんの「2014年の世界博覧会」を見てみたいと思います。

「2014年世界博覧会」が書かれたのは、1964年なので50年後の未来を予測したSF作品になります。この作品の何パーセントぐらい実現しているのでしょうか。

さて、ここで会場の方に聞いてみたいのですが、0%から55%まで実現していると思われる方、拍手をお願いします。(拍手) 優しい拍手ですね。

では、56%から95%実現していると思われる方、拍手をお願いします。(拍手) 2つ拍手している人がいませんか。

では、96%から100%実現していると思う方。(拍手) 3つ拍手している人がいるような気がするんですけど。

では、答えを見てみましょう。答えは57%でした。どうでしたか、当たっていましたか。当たっていた方は、今日いいことがあります。当たっていなかった人は来週いいことがあると思います。

SF上で明確な欲が記述されたすばらしい例です。

見てみましょうか。後ろの人、見えますか。私は目が疲れてくる年なので、読み上げますね。

家電は半分ぐらい合っていました。「自動コーヒーメーカー」、ほとんどの家であると思います。「冷凍食品が冷凍庫に保存されている」、冷凍庫ありますよね。2014年の機器は「電源コードがない」、何かちょっとだけスマートフォンで電源コードなしで充電できるものもありましたので半分ぐらいです

ね。

当たっていなかったのが「何でも拾い上げたり整理したり掃除をしたり、各種器具を使ったりする能力のあるロボット」、そういうロボットはないですね。

今、2023年現在だと一般普及に向けてプリファードネットワークスとかがいろいろなスタートアップ、拾い上げたりするロボットを発売しようと準備していますけれども、2014年時点では研究段階でしかなかったです。

あとは、「窓はなく、窓が取り付けられていても強い太陽光を遮るために偏光されている」ということで半分ぐらいです。

一方で、情報工学、情報科学の分野はどうでしょうか。ほとんど正解です。びっくりするのは、乗り物のところで「コンピュータ制御による自動操縦する車が登場」と書いてあります。登場しているだけです。リリースされただけで、一般普及はしていない。一方で教育現場では、「テレビやビデオが導入されている」、導入されていると登場は違うんですね。より具体的に社会にどのぐらい普及しているかというのが考えられて設計されているすばらしいSFですね。とはいえ半分ですね。

食料問題、エネルギー問題は半分ぐらいです。労働も半分です。労働とか社会的変化、特に、社会的変化は予測するのが難しいです。つくるのが難しいところです。どういう未来を自分がつくるかというのは、自分の周りは結構発明することができるんですけども、社会全体がどういう文化になっているかというのはなかなか難しいところではあります。

とはいえ、社会的変化以外は自分自身で発明していく、夢を実現していく、欲望を実現するというのが見えたいい例ですね。この例は、作家のアシモフさんがあまり働きたくなかったらしいんです。そのせいで外れが多かったです。57%が実現しています。

では、もう一つ見てみましょう。SFという名前があまりなかった100年以上前です。「21世紀の予言」という報知新聞、1901年です。おそらくその時代に生きていた人はこの会場にはいないと思うのですが、何パーセント実現しているか聞いてみたいと思います。

100年前ですよ。正確に言うと122年前。どうですか、122年前を想像できますか。そのときに100年後を予測していると。皆さんにまた聞いてみたいと思います。

120年前の報知新聞、当たっている確率は0%から50%だと思う方、拍手をお願いします。(拍手) ちょっと控えめですね。

51%から100%だと思う方。(拍手) さっきより多いですね。見てみましょうか。

実は、先ほどのアシモフさんの小説よりも正答率が高いです。100年前ですよ、61%。情報通信の部分は全問正解です。全問予測が当たっている。びっくりするのが「無線電話というものができている」と。その当時、電話や写真がすごく注目されていて、無線の電話があったらいいなと。無線電話とかカラー写真とか、もっとびっくりするのが電話と写真だったら、「電話と写真が一緒になったものができるだろう」と。電話と写真が一緒になったら買い物ができるだろうみたいな。今のアマゾンなどを予測していたんです。

ほかにも乗り物もほとんど当たっているんですね。これはびっくりするのですが、ただやはり社会的な変化やエネルギー、そういったものは正答率が低いですね。「野獣が絶滅する」って、すごいですね。

そのほか、ロボットという概念がまだなかったのも、基本的に犬がお使いをするみたいな。すごくかわいらしいです。「会話ができて、犬が人間のお使いをする」と書いてありますね。とはいえ、欲と想像と社会的需要が明瞭化されたものは半数以上実現しています。

先ほどの疑問点の答えとしては、半分は予測してちゃんと明確、明瞭に設計していくと、夢とか欲望というものは半分ぐらいは実現する。だから2つ夢を持っておけば、2つ何か欲望を持っておけば、1つはかなうのではないかな。そういうふう設計して行ってほしいと思います。

ちなみに、私は工学系の研究者であり企業家なので、言っておきますが工学系は82%実現します。なのでより実現したい、どうしてもやりたいことがあるという生徒さんや児童がいらっしゃいましたら工学系をお勧めしておいてください。

先ほどのアラン・ケイさんの言葉、「未来を予測する最良の方法は未来を発明すること」と言ったのですが、欲というところに注目して行ってほしいなと思います。

私の分野は、特に欲というものにすごく注目しながら研究開発をしているのですが、社会的ニーズもそうですし、個人のニーズ、そういうものをマーケティングしながら研究開発もして行っています。

学生さん、生徒さん、児童たちがこれからキャリア形成をして、特に学生だけではなくて、教員の

皆様もキャリア形成していく中でもっともっと大学を活用してほしいというふうに思っています。とか活用しないとなかなか今後の世の中を生きていくときに難しくなってくるころがあると。その話に少し触れたいと思います。

大学とキャリア形成です。一般的に大学は学士を取って卒業して就職される方がほとんどで、そのほかにもっと専門性を高めたいときに修士に進学します。工学系や理系は修士に進学される方が多いですね。その後、就職して部署のリーダーになりたい、起業したいという方、研究者になりたいという方は博士に進まれます。

ただ、最近、大学進学をする際に、専門分野を少しとずつ変えるので、学部と修士と博士、全部移動される方が多いです。私もそうでした。トップの研究者と一緒に研究したいということで移動される方が多いです。なので大学の学士の受験がそこまで重要なのかというふうに問われるようになってきました。理工系の場合は、修士に行く方が割的に多いので、就職するときにも修士課程は取ってねというところも多いですし、そういう意味では学士はどちらか研究というよりは、教育がしっかりしているかというところにフォーカスを当てて選ぶ方が多いようです。特に国立大に関しては、昔と比べて運営費交付金が結構差があったんです。今はほぼ国立大学、地方も旧帝もほぼ一緒なので、そういう意味では教育現場というのは、大学が変わってきていて、研究を深めたいというときに修士で変えるという、第一志望とか第二志望を決めるというふうになってきました。

さらに、こうなると教育期間が長くなるんです。普通は学士で卒業して、就職してから大学へ行くという状態だったものが、修士や博士に行く方がキャリアとして多くなってきた。特に修士に行く方が増えたんですけれども、博士に関しては1回社会に出て就職してからまた博士を取るとか、博士を取らなくても単位だけ取りに来るという方が増えてきました。働きながら学ぶことが、ほぼ必須になってきて、さらには学びながら働くということも増えていきますね。

私の場合は、人生の計画の中に起業するというのを入っていたので、工学系の研究開発をしながらユーテックというベンチャーキャピタルで経済学や経営学、法律を学んでかつ働くという。インターンをしたり経産省系の開発事業に入ってみたり、ディズニリーサーチというところで研究者として働いてみたり、博士課程の学生ですけれども、給料はまあまあよかったです。生々しい話で、博士課程の学生さんの給料は、日本の新卒の給料の1.5倍くらいです。そのくらいはもらえるので、学生でちょっとバイトしながらという感じではないです。本格的に働きながら学んで研究開発もしていくというスタイルが増えてきています。

ですので、専門性を高めるというのは、そんなに資金がいるというよりは、社会人をしながら逆に社会人になってしばらくたってから学び直すということで、スキルアップして生産性を高めていくというのが最近は増えています。

これも実は教育を受けるという、もしくは教育するという体験なので、体験はものすごく重要です。どういうふうにして人生の中でいろんな体験をして、何を発明して、どんな未来をつくるかという。そういう意味で、体験設計そして体験共有はものすごく重要だと私自身は感じています。

体験は、今テレビとか、それから皆さんがやっている授業であったり、カリキュラム設計だったり、いろいろなコンテンツで提供されています。特にデジタルにおいては、こうやってマイクとスピーカーそして今は直接見えていますけれども、カメラとディスプレイや、いろいろな情報機器を使って遠隔に体験共有しているのですが、視覚と聴覚に限られています。基本的には人間というのは体験を分かち合うんですね。こうやって口頭で分かち合うこともありますし、歌で分かち合うこともありますし、絵で分かち合ったりいろいろな方法を使っているんです。

例えば、これは200年ぐらい前の歌川広重の浮世絵、お伊勢参りの絵ですね。もちろん口頭で、お伊勢参り楽しかったよという分かち合いもできるんですけれども、体験共有はすごい重要なので、その当時の最先端の技術、この当時は木版印刷が最先端だったんですね。その最先端の木版技術を使って体験共有をしています。

では今はどうでしょうか。今は、主に視覚と聴覚をスマートフォンやテレビやラジオ、新聞とか、そういうもので体験共有をしています。

ただ先ほど、バーベキューにテレビ会議で参加してみたら、能動的ではないのであまり楽しくないんです。ではこれをどうやって今後能動的にしていくかというお話をしたいと思います。

どうやって能動的にしていくかというと、固有感覚という情報を使います。皆さん、感覚情報は五感というふうに思われる方もいらっしゃると思いますが、五感というのは紀元前のアリストテレスが提唱した感覚の種類分けで、そのほかにも仏教だと六根と言われるものもあります。6種類だけと

いう。

ただ、最新の研究、認知科学、生理学などのいろいろな研究分野では、感覚というものはいっぱいあるんです。少なくとも22個あると。多い人だと30ぐらいに分類できるのではないかとされています。その中で、能動的な体験をするときには、固有感覚、物の重さであったり何かで物をつかんだときに、重いとか軽いとかそれから抵抗感覚があるとか、反力が発生するとか、位置だったり自分の身体の運動であったり、身体に関わる、深部感覚、深いところにある感覚が重要なんだということが分かっています。

この感覚をデジタル化して伝達することで、能動的な体験を提供できるのではないかとということで、BodySharingという概念と技術を提唱しています。見ていただくと分かる通り、ロボットとBodySharing、固有感覚を共有しています。身体の位置や姿勢や運動であったり、逆に誰かが体験した体験を人間に出力するというのもやっています。

この方は脱力状態ですけれども、電気刺激で固有感覚を共有しています。将来的には料理、教育現場、スポーツ、観光。スポーツと観光は実はもうやっているの、今日紹介したいと思います。それからエクササイズとか労働の分野、今、様々な分野で体験共有をしていて、私はひきこもりまして、皆さんはいろんな体験を得ていくという、そういう未来をつくろうとしています。

技術的なことが気になったと思うので解説しますが、被験者さん、これは完全脱力状態で電気信号を、これは前腕に与えて、手指の動きを制御しています。これでピアノはこういうふうに演奏してくださいとかを伝えるわけです。後は重さがどのぐらいかとか。こっちはセンシングの部分です。手がどういうふうに動いていますよとか、どういうふうに握っていますよとか。筋肉がどう動いていますよ、力加減はどうですよみたいなものを伝えています。

こうすることによって部屋の中にいながら遠隔地にいる、ニューヨークの体験とかインドネシアの体験が一瞬で得られるだけではなくて、メタバース空間のメタとは、ユニバースを超越する、現実世界を超越したような世界で体験共有していくという。そういった体験共有の技術開発しております。

一例を見せると、通信技術と連携しながら、これは沖縄県東村の mangrove の体験を東京で得られるようにというふうにしています。パドルを漕いでいる感じだったり、水の重さというものを提示しています。地域格差がなくなるという単純なものだけではなくて、身体的な格差もなくなってくる。子どもの状態なんだけれども大人のような身体でいろいろな体験ができるとか。これはコナンの逆ですね。コナンのように言うと、大人の手だけども子どもの体験をするとか、そういったものまでできるようにしていています。

普通カヤック体験というと、言葉で伝えますよね。言語でやると、今日は比謝川の mangrove でカヤック体験をしてみました。カヤックは細長いタイプの小船でというふうに説明すると思います。ただ、この比謝川というものが一体どんな川なのか口頭ではなかなか伝えづらいです。

比謝川について知っている人は、挙手をお願いします。(挙手)後ろのほうに結構いますね。全然知らないと思っていました。各地からいらっしゃった方は、おそらく比謝川って何だよと思うかもしれませんが、沖縄県の嘉手納町にある何ともいえない色をした川です。後でググったら分かります。きれいと言われるとそうでもないかもしれないが、あそこで mangrove 体験をやっているのかと。やっていますので、もし時間がある方は mangrove 体験をしてみてください。比謝川、地元の人あの景色かみたいは何となく伝わるのですが、単純に言語でこうやって伝えるとなかなか伝わらないんです。広い川なのか、パドルは急いで漕がないと川の流が速いのかどうなのか分からない。

では、聴覚情報をちょっと聞いてみると、こんな音がします。(※川の音) ちょっと聞こえましたね。ありがとうございます。

パドルを漕ぐときのゆっくりした音が分かると思います。これは、比謝川はすごく静かな川でして、正直言うとあまり水が動いていない。何ともいえない色をしているのはそういうことなんです。そういう川でして、すてきな川ではありますけれども。ではどういう色なのかということ、そういうものは視覚情報で見ることが出来ます。これは比謝川ではなく海外の川です。比謝川が気になった人はググってください。すごいです。もしくは今日沖縄にいますので、行ってみてください。

固有感覚情報を伝達すると自分で漕ぐんです。自分で漕いで、かつ重さというものが感じられるので。こんなふうに自分で漕いで水の重さとか本人は感じていらっしゃって、それとともに視覚情報、聴覚情報が連動して動くので、川の流はゆっくりで、こういう色で水は意外と浅くて、パドルを下につけるとぶつかってしまうとか、そういったものを感じて能動的な体験をします。

こんな感じで、体験共有を若いうちからいろんなものに使ってみたいと思って、私が高校生だった

ときBodySharingを構想したのですが、そんなサービスはないんです。サービスがあったらすごいお金儲けをして、世界中のいろいろにサービスを得るだけのただの人になろうと思っていたら、サービスを一生懸命探してもない。

誰か欲しがっているのかと思ったら、そのマーケットもないんです。では誰か研究しているかと思って応用研究を探してみたら応用研究もなかったんです。仕方ないなと思って、基礎研究も探したんですけども、基礎研究もほとんど工学系ではなくて、唯一リハビリテーションで少しやっているかなぐらいの感じで、医療系で少しあるかなというぐらいでした。ちょっと難しいなと。ただ、自分がこういう未来を得たいんだという、こういう体験をしたいと、こういうシステムが欲しいと思ったときに、どうしたらそういう体験を得られるのかを整理してみたんです。

既に世の中で売られている体験です。サーフィンの体験とか、自分が物理的にサーフィンをしに行き、海に行きサーフショップに行きサーフィンしたいですと言ってサーフィンするとか、テニスをしたいですと言って、テニスコートに行きテニスラケットを持ってテニスをして、テニス仲間と合ってテニスをするという、既にある既存の体験をしたいという欲望が強いときはどうしたらいいかというふうに考えると、最低限、欲がないといけないうですね。

それからお金、必要ないときもありますけれども、あったほうが体験を得やすいとか。後は技術適用です。技術適用は結構重要で、今、新しくサーフィンに行きたいとなったら、昔だったらタウンページを開いて、若い人には伝わらないかもしれないですね。私の時代はタウンページを開いてサーフィンショップを探して電話をかけて、何月何日空いていますかとカレンダーを見ながら日程調整をしたんです。今は、スマートフォンで検索してラインで予約してみたいな、そういう技術適用が必要です。なので、技術適用と書いています。

さらに最近では進化が早くて、例えばA Iだと最近よく出る言葉としてChatGPTがあります。講演会の時間が余ったらその話も少ししたいと思います。

ChatGPT、例えばプログラミングをして何かつくる体験を得たいと思ったときに、昔だったら技術適用、プログラミングの勉強をしてプログラムするんですけども、もうここ半年で全部変わったんです。半年で技術適用する対象が変わって、今は、きれいな日本語、文法的に間違っていない、主語と述語と目的語がきちんとある、活用が間違っていない日本語できちんとA Iに指示が出せることがプログラミングや開発をする必須のスキルです。

私が採用するときも、最終面接は私がやっているんですけども、日本語がきちんと使えるかどうか。開発者であって知識があるというよりは、日本語が使えるかどうかを重視しています。技術適用は本当に半年ごととかに変わってくるので、なかなかさらっと書いていますけれども難しいところです。

既にある体験を得るといえるのは、この3つだけでいいのですが、私が得ようとした体験といえるのは、世の中にない体験を得ようとしたんです。それが世の中にないどうしたらいいのか。

整理整頓をしていくと、先ほどの3つのビジョンとお金と技術適用に加えて、さらに3つ必要だということが分かりました。

世の中にない体験なので、新規に何か新しい解決策を見つけないといけないうんです。新規の解決方法を自分で解決するというもの。誰かに頼むという解決方法でもいいんですけども、そういう新規の解決方法と、あとは自分自身が解決しておもしろい体験をするというだけではなくて、自分としての寄与じゃなくて他者と共有できる寄与というものが必要になります。

私の場合は、部屋の中でひきこもりたいということだったのですが、自分だけがひきこもりというわけではなくて、ほかにも同じように考えている人たちや本当に困って外出困難である人たち、そういう方々にもちゃんと貢献できるような再現方法や体験を得るためのシステムとか、もしくは仕組みづくり、座組づくりというものが必要になってくる。さらには再現性です。100回に1回成功するのではなくて、100回中80回、90回成功する。そうじゃないとなかなか体験というものは得られなくて、そういう意味でどうやって自分がやりたい目標に向かって、欲に向かって進んでいくかというときに、最低限必要な、ほとんどの欲に対してこの要素が必要で、将来どんどん変化していく世の中で、これだけはとりあえず不変だなど。最低限の不変性を持った要素だということをもとめました。

これは私一人でまとめたわけではなくて、いろいろな人とディスカッションをして、この要素は最低限必要な要素だと。いろいろな分野の方々が、いろいろキャリア設計をしていく中で必要な要素です。

私の話に戻るのですが、私が部屋にひきこもりたいというふうになったときに、技術的な基礎研究だなど。基礎研究はレベル分けをしていくと、TRLという技術の発展レベルというものがあるんで

すけれども、技術の発展レベル、2000年代は基礎研究のさらに下のほう、9段階中のレベル1というようすすごい低いところでした。では少しずつ積み上げていきましょうと。

そのとき1人でやったのは事情がありまして、先ほどちょっとお話しした世の中にはない体験を得る要素のうちの自己と他者の寄与がなかったんです。他者への寄与があまりなかったので、一緒に協力してくれる仲間があまりなくて、一人で基礎研究をやりたいかと仕方なく研究したんですね。仕方ない、研究者になろうと。誰もそのときは仲間がいないから、TRLの8とか9まで、つまり世界で普及するまでは仕方ないなど。これは研究者は自分で起業しないと駄目だということで準備を進めていきました。

ここから基礎研究の内容をどうやって開発したかを話すと、たぶんあと2週間ぐらいかかるので省略します。

16年ぐらいたちました。そうするとセンサーとアクチュエーター両方、まずコンピュータに入力するセンサーと、コンピュータから情報を出力するアクチュエーションの両方ができたんです。よかったと、で、16年たちました。結構、細かく設計していったんです。ちょっとだけ内容を紹介します。

これは力加減を伝えています。指先の力加減はなかなか見えないんです。どれぐらいの力で押しているのか、どのぐらいの力加減で握っているか。楽器演奏の演奏方法を伝達するときとか、家庭科の授業で料理をするときとか、スポーツをするときとか、体育の授業でスポーツをするときとか、力加減というのは、どうやってどこの筋肉を使いますかみたい。そういうものを伝達していくセンサーの部分です。

どうやっているかという、普通脳が筋肉は制御しているんですけど、そうではなくて筋肉の部分に光を、かなり強い赤外線光のようなものを当ててその反射率を見えています。筋肉が膨らむとセンサーとの距離が近くなったり、筋肉が赤く膨らむので、そうすると反射率がすごく強くなって、それでこの反射率を見て筋肉が膨らんでいるな、変異しているなというのを見て、この人はどのぐらいの重さのものを持っていますよ、どのぐらいの力加減で入れていますよというものを工学的に検出しています。もしかしたら詳しい方が会場にいらっしゃるかもしれないので、筋電図があるじゃないかと言う人もいるかと思いますが、筋電図とは違うんです。筋電図は、信号増幅、神経信号を増幅して計測するもので、我々がやっている筋変異という筋肉の膨らみを物理的に計測しています。なので少し違うんです。ノイズにすごく強いです。スマートフォンを持っていますが、普通の会場でも使えるということで筋変異センサーは今すごく注目されています。

例えば体育の授業がどう変わってくるかという、これはゴルフのスイングの様子ですけども、見た感じは全部一緒です。もう一回再生します。何かついていますけれども、普通に、外形的に見ると一緒なんです。ただ同じようにゴルフをしている人なんですけれども、筋肉の中の状態が全然違って、これは右手を計測しているんですけども、右手の実は、小指、薬指、黄色で見える部分です。小指、薬指の部分に力が入っていないとゴルフスイングはうまくできなくて、右手ですよ。かつ、右手のピンチングに使うところ、親指、人さし指、中指、ここに力が入っているとゴルフクラブが手の中で動かないという。それでヘッドスピードが落ちてしまっとうまくスイングできないというふうに言われていて、では、どうやってそれをほかの人に伝えるかというもので、実際に計測してこんなふう、皆さんに今日は電気刺激装置をつけられないので、今日は見やすい視覚的な情報で提示しますけれども、赤色が人差し指、中指です。ピンチングに使うところ。大きくなってはいけないところです。黄色が小指、薬指、力を入れたほうがいやつです。なので、下手な人は赤が大きくなって、うまい人は黄色が大きくなるんです。こんなふう分析をして教えていく。なので、自分がうまいやり方をやりますから、なんとなく見て盗んでくださいみたいなものはなくなって、ではそのままインストールしましょうと。

これは電気刺激を与えてインストールしていくというのをやっています。

本当に分析していても全然違うのですけれども、元プロの方にデータを取らせていただきましたが、本当にプロの方は力を抜いていて、全然力を入れていなくて、中級者や初心者はすごく力を入れてブレブレなんです。なので一発で分かります。ただ、私はゴルフは全然やらないので見た目は全部一緒で分からないです。今までグツとしてパーンとしてズバツとするんだみたいな、そんな指導をされる方はいないと思いますけれども、私はたまにやっているからかもしれません。そういうなかなか言語では伝えられなかった、かつセンシングもできなかった、そういう体験を共有するというをしています。

このセンシングの技術はスポーツにも使われていて、これはものすごく握力のあるアスリートの方

なんですけれども、筋肉の使い方が全然違うんです。壁を単純に押ししているだけなんですけれども、赤と黄色の線は拮抗して反比例するはずなのですが、ちょっと押し方を変えると比例して押せますよね。普通、私たちの筋肉は反比例して動いているんですけども、反比例させずに拮抗する筋肉を比例して動かせますよみたいな。こんなことができますと言われて、スポーツではこういうものが必要なんだ、運動では必要なんだと言われても私には分からないと思いながら、データを実際に取ってみるとこんな感じで、分かりますか。青と赤の筋肉のグラフが反比例していたものが、途中から比例して、きれいに比例しているのが分かると思います。でも見た目は一緒なんです。見た目は一緒ですけども力の出し方が全然違う、身体のコントロールの仕方が違うと。見えなかったものを見えるようにするという、そういうものがセンシングでコンピュータに入力されていきます。

では、今度は人間に出力する側です。人間に出力するときには、こんなふうに脳から、科学信号だったり電気信号だったり筋肉にあって、それで筋肉が膨らむのですが、それはコンピュータ側からかなり疑似的な信号を与えて、手指そして足を制御しています。これは実験のときに制御している様子です。セットアップもしています。

これは何の動きをしているのか全然分からないと思うんですけども、実はこれで何の動きをしているか気がつく人がいますか。たぶんもしかしたら専門の人なら分かるかな。これで気がつきましたか、何の動きをしていると思いますか。実は、楽器の上に置くと琴の演奏の手の動きでした。こんなふうに制御して、こうやって演奏するんだよというふうに、見て覚えるというよりは身体に直接情報を伝達して覚える、体験を共有するという時代になってきました。

これは16年かかったんです。高校生のときから構想して計画を練って、ちなみに2000年代から2008年まで計画を練ったり、自分で学習するのにかかりました。本格的に研究を始めたのは、2008年から2016年の間に基礎研究の分野を築きました。その後、応用研究に発展しないといけないと。そのときに応用研究は、先ほど話しました、世の中にはない体験を得る方法の中で、自己と他者の寄与、コントリビューションというのが寄与ですね。寄与をしていくという意味で、ほかの人に寄与しながらほかの人の目的も達成しながら仲間を増やさないといけないということで、2015年から基礎研究がほぼ終わり始めたときから、製品を開発して、起業して、応用研究の人たち、開発研究の人たち用にデバイスを発売しました。本当に他者の利益になっているのかどうかクラウドファンディングをして、ピクスタート、とりあえず中学校の頃に白地図を書いているときに産業地帯、シリコンバレーかみたいな、そういうおぼろげな知識でシリコンバレーにとりあえず行ったんですね。シリコンバレーに行くと、おぼろげな英語でどうやったらこれを社会的な需要をチェックできますかと。いや、クラウドファンディングをして、サンフランシスコにテックランチ(Tech Crunch)という世界一有名なプレゼンテーションの場所があるから、とりあえず行ってみたいかな感じで言われて、そうですかと。では、クラウドファンディングをしてTechCrunch・サンフランシスコに出てみて、確かに社会的に需要があるんだなということを確認しました。2か月間で資金を調達できたらオーケーだと言われたんですけども、なんと22時間で目標達成しました。世界的にひきこもりたい人がこんなにいるんだとびっくりしました。こんなに外に出たくない仲間が世界中にいるのかと思って、よかったよかったと。

研究者にまず使ってもらいましょうというふうに出したんです。そうしたらけしからんことが起きたんです。いいことなんですけれども、みんなが買って世界で180以上の、応用研究のプロジェクトが立ち上がったんです。何がけしからんって、私が出している論文よりみんないい論文を出しているんです、180個も。ちょっと許せないと思いながら、でもいいことだと思って、みんなトップカンファレンスにトップジャーナルに通してと思って。まあいいよ、いいんだ。初めは数えていたんですよ。2010年ぐらいは、自分が書いた論文しかないな、残念だなみたいに。2008年から研究してやっと研究成果になったのが2010年ぐらいで、2012年に起業して忙しいから論文を書けないみたいなことをやっていたら、2013年ぐらいからちょっと引用して論文を書いている人がいるぞと。2016年あたりにもものすごい頑張っている自分論文を書いたんです。2016年前後に発売したら、数えられなくなって翌年から。みんないい学会を通していて。悲しくなると思って2021年から数えるのをやめました。

それで応用研究も一気に進んで、例えば先ほどのインプットとアウトプット、センシングとアクチュエーション両方を使って、ロボットとBodySharing、固有感覚共有する。単純に、握る・離すという運動を書くだけではなく、強く握るとか、逆にロボットから刺激を受けると人間側にも刺激が返ってくると、力加減が返ってくるという両方、ロボットとBodySharingするとか、そういったものが広まってきました。

やっと応用研究が2020年までに発展していったよよかったな、応用研究も、もうちょっとビジネスに

も進めていこうということで、ビジネスに進めるためにはコンサル会社さんとかも含めて、日本政府も巻き込んでSDGsを出しながらいろいろ話しています。

社会的な課題と照らし合わせて、例えば農業課題に関して農業従事者がすごく減っている。ではAIでどうにかできないかといったときに、AIだとなかなか難しいところもあるんです。

農業をやったことのある人はいると思うんですけども、農業をやったことのある人、挙手お願いします。(挙手)結構いるな、ありがとうございます。何で何ですか。なんでだろう。会場にいるほとんどの人は教頭ですよ。何で農業をやっているんですか、兼業ですか。(笑)びっくりするんですけども。農業やっていないと思ってしゃべろうと思ったら。

御存じの方は分かるという話で、御存じない方は先ほど手を挙げた方に聞いてください。

品種改良をして毎年毎年新しいものが出てくるんです。ありがたいんですけども。毎年すごくいい種が出てきて、AIのロボットを開発している人たちは「去年、作物がとれるようになったのでよかったです」と言ったら、「あ、品種改良されてちょっと大きくなったんです」とか言うんですよ。あと「糖度が増えて柔らかくなりました」みたいな。「また？今年も新しくなったの、AIで追いつかない」みたいな。

そういうことがあって、なかなかAIロボットだけでは農業従事者を補充するようなどころには持ってこられないということで、今農業従事者はすごく減っていて本当に少ないんです。

2000年代は日本国内に398万人いたのが、2017年に182万人で、私最近のデータを最近見たんですけど、もっと150万人とか、さらに一気に減っていて、さらに高齢化している。農業従事者は60代だと若いと言われるらしいです。なので、引退してからが本番だみたいな、そういう引退してからやっとなんかというように言われていたりとか、そもそも課題2にありますけれども、都市一極集中型のところで、若い子たちがなかなか地方の農業に興味を持ってもらえないというところ、それから障害者が農業現場で働こうとしても、賃金が上がらないという、そういう肉体労働も含んでいますから農業は含んでいますから。そういう意味で身体的な障害がある場合は、農業従事が難しいという。そうしたときにリモートで遠隔地に設置されたロボットを操作して、都会のユーザーとか外出困難者に作業してもらおうというのをやっています。

昨年度は、こうやってスマートフォンでロボットを制御してやっていたんですけども、今年度はBodySharingでこうやって手を動かすとそのままロボットも動機して動いて、収穫作業ができるという、もしくは雑草を取る作業ができるというのをやっています。

クラウドファンディングを今もやっているんですけども、遠隔地から農業体験ができるというのはなかなかなくて、こういったところで少しずつ取組をして、農業体験とか観光体験とか、遠隔教示、エクササイズやリハビリテーション、いろんなのをやっています。

その中で夢を実現する順番というものがあって、ほかの人たちがやった事例を真似てビジネス展開をしています。私の場合は、アップルとマイクロソフトを事例に取ってビジネスの展開の方法を考えていて、アップルとマイクロソフト、私今アップル製品を使っていますけれども、どちらも素晴らしい製品を出していて、ハードウェアを普及するときに、一長一短ありながら2社は発展していったんですけども、マイクロソフトのほうが一気に普及したんです。なぜかという、アップルは初めのころはアートとかパーソナルユーズを第一にしてサービス展開をしていて、マイクロソフトの場合は、ビジネスの場で使うところを第一優先にサービス展開していったんです。ビジネスのサービス展開のほうがものすごく導入が早かったのも、初めはマイクロソフトが一気に皆様の手元に普及したという経緯があります。

ということで、先人の知識、コンピュータの場合は歴史というほどではないですけども、歴史を見ながら歴史に学びながら事業開発をしています。

例えば、ビジネスの場でBodySharingをするときに、働く現場の、働く体験を共有しようと。働く体験を人間同士で共有しようと初めはしたんですけども、そうしたら疲れるのは嫌だと。タナカさんが疲れたら玉城も疲れるとか、本当にそれは無理だと。まあそうですねという話になりまして、ではタナカさんが働いている体験をメタバース空間上のアバターに共有させましょうと。私が働いて楽しいとか、働いて疲れたとか緊張しているという体験をアバターに共有しましょうと。そのアバターをほかの人が見て、この人はあんな働き方をしているんだという体験共有の仕方をしています。

メンタルとフィジカルとスキル、この3点を共有しているんですけども、メンタルというと緊張していたりリラックスしていたり、そういったものを共有しています。フィジカルだと肉体疲労ですね。これを共有していて、固有感覚と関係ないじゃないかと思うかもしれませんが、実は固有感覚は

ものすごく関係していて、メンタルでリラックスしていたり緊張していたりすると固有感覚はすごく変わるんですよ。特に首の後ろとふくらはぎの感覚が変わります。固有感覚が変わります。緊張していると、首の後ろの筋肉が張るんです。後はふくらはぎの部分も張ります。すごく緊張した会議をすると、肩が凝ったり、足がむくんでぱんぱんになったりすると思うんですけども、それはすごく仕事をしている証拠です。自分で自分を褒めてください。逆に足がパンパンにならなかつたら、ちょっと頑張ってください…(笑)、それは場慣れしているんでしょうね。

メンタルの状態とか、後は肉体疲労をしていると筋肉の状態、固有感覚は震えが出てくるんです。どうしても疲れてくると筋肉をうまく制御できなくて震えてくるので、その微弱な震えを検出して肉体疲労というのを見えています。

もちろん首の後ろにはつけず基本的には足首付近につけて、今も使ってもらっています。いろんな会社様に使ってもらっているんですけども、これを見える化すると、こんなふうに見えるんですね。体力がどのぐらいあって、緊張しているかどうかというのが、リモートで全部見えるようになります。

実はこれ分析していくとすごくいいことがあって、働き方について、右にあるグラフ分かるでしょうか。チームA、B、Cのグラフがありまして、Aチームはすごくよく働いているんです。見ると、夕方の元気度が6段階中2でした。2というのは、一晩寝たら明日元気になるぐらいの疲れ具合です。チームCを見ていただくと分かるんですが、チームCは夕方の元気度が4です。これはほとんど働いていなかったんです。要因は、チームCは人が多すぎたんです。なのでほかの助けてあげたい部署に異動しましょうと。

見てほしいのが、チームBです。Aと同じように夕方の元気度が2だったんです。よく働いていて生産性も上がっている。ただ、部署異動をしたいとか、きついから、本当に精神的にきついというふうにおっしゃる方が多くて、調べてみると分散値が大きい。つまり日によって元気度が4だったり、水曜日は4なんです。暇で定時より前に終わってしまって何をやっていいか分からないみたいな。一方で、金曜日になると徹夜するかもしれないみたいな。徹夜、少なくとも朝3時ぐらいまで働くという。そういうことをやっている、元気度が0になるんですね。1日寝ても回復しませんみたいになる。もう1日ちょっとぐらい休まないといけないというのがチームBでした。チームB、水曜日と金曜日が定期的に忙しくて暇というわけではなくて、ランダムに忙しくなったり、急に徹夜になったり、急に暇みたいなそういうチームでした。なので過重労働になっていて、生産性は高いけれども過重労働になっているという状態でした。

ちなみに、チームAは、毎日夜8時ぐらいまで働いているんです。毎日残業なんですけれども、みんな幸せそうでした。なぜかという、必ず夜8時に終わるからです。定期的にリズムが整っていると、生産性が高くて、しかもチームAのところは働きたいという人がいっぱいいたので、働きたいという人もいっぱいいて、むしろ定時の5時に帰るのが嫌だみたいな人たちがばかりだったので、そういうものもあるかもしれませんが、毎日残業しても大体同じ時間に帰るというのを繰り返していると、精神的に安定してきて、うまく働けるんだなど。残業しても同じ時間というのが結構大切なんだということが、こうやってアバター上、メタバース空間上で体験共有をすることで徐々に分かってきました。

平等配置とか、リモートワークでも平等配置とか、いろいろなものを行っています。こういう物理的なサービスのほとんどは、BodySharingとAIによって提供できるように今進めていて、先ほどのリモートワーク用とか、働く場面、メタ体験、働き方の体験共有というサービスはもうリリースされていて、各企業様に使っていただいております。これがスポーツとかリハビリテーションの分野に今、展開する準備をしていて、徐々に教育現場でも使えるようにと。

実は教育が一番難しいんです。教育を今研究しているのですが、サービス導入にすごい時間がかかっていて、導入するのが難しいのではなくて、技術的に難しいです。教育、ノンバーバルコミュニケーションといって、非言語情報伝達がとても多くて難しい。皆さんがされているお仕事がどれだけ大変なのかは研究開発していく中で痛感していて、全分野の中で一番最後にきています。早くサービスインしたいんですけども、時間がかかっています。まだまだ教育現場は研究が必要そうです。

それよりも、観光とかリハビリテーションとかスポーツ指導とかリモートワークは比較的教育に比べると簡単に体験共有というものができはじめています。やっとTRL、技術的なレベルが上がって、ちょっとずつ実現していつているんですけども、私が冒頭で話した2000年から2002年のあたりに構想して、この欲を実現するとなって、TRLがやっと上がってきて、もともと研究とか事業計画は2029年までしか組んでないです。なぜかという、2029年になったら私は完全に隠居する気です

ね。結構、もう年いっているんです。2029年になったら完全にひきこもって、たぶん皆さんにも会えなくなります。多分、今日だけです。2029年になったらもう出ないということで、この8とか9の部分で、後は社会的普及ということを経済的なレベルではなくて社会普及のレベルに、BRL（ビジネス成熟度レベル）というものがあるんです。次のそのステップを今踏んでいるんですけども、その社会普及に2029年までかかる予定です。

今まで言語情報、視覚情報、聴覚情報と皆さんデジタルで当たり前のように共有していたように、これから固有感覚という情報もデジタルで共有していくという体験共有は進化していきます。体験共有することで学ぶことも増えてくるんですけども、実現することは急速に変化していくので、そういったところを私のほうでも、我々の研究チームでも皆さんと一緒に実現していければというふうに思います。今年から、BodySharingで体験を共有し合うようにしていこうかなということで、サービスも今2つリリースしていきましました。

それはさておくとして、今回の講演、もう終わりなんです。実は67分たっているんです。70分しかしゃべっちゃ駄目と言われてるんで。

あと20分しゃべっても大丈夫なんですか？分かりました、勘違いしていました。まとめに入ろうとしていました。

時間があるので、少しだけ違う話をしてもいいですか。ありがとうございます。ではまとめずにいきます。

こういうふうに余った時間があつたときに、しゃべりたかつた情報があるんです。ChatGPTも話したいですし、実は近々に困っていることがあるだろうなと思って、教育現場の方々によく聞かれることがあるので、これは話しておきたいという情報がありまして、あと20分いいですか。しゃべってもいいということなのでしゃべります。ありがとうございます。

いつも聞かれるのはソーシャルメディアはどうやって使ったらいいのかと。ソーシャルメディアを使わないと情報発信できないですし、かといって、情報発信したら炎上するしみたいな、どうすればいいんだという話を聞くので、講演内容とは少しずれるのですが、今日時間があつたら話したかつたので実はスライドを用意していました。

少し話しますがいいですか。すごくうなずいてくださる、ありがとうございます。

特に教員もそうですけれども、学生さんもソーシャルメディアを使うなどはできないんですよ。今、学生の間で失敗するのはいいけれども、社会人になって失敗したら目も当てられないというか、捕まったりしますからね。正しい使い方を教えてくださいと。

正しい使い方は、そこまでガイドラインがなくて、なぜかというとなん年々ソーシャルメディアは新しくなっていくので、ガイドラインができて毎年違うなとなっていくので、ソーシャルメディアの使い方を話したいと思います。

話す前に私、言いたいんですけども、毎年早稲田大学で1、2年生の300名から400名ぐらいに授業をしているんです。琉球大学と東京大学の先生なのに、早稲田大学でもなぜか授業をしていて、ソーシャルメディアを使った授業をしているんで。しかもソーシャルメディアの中でも悪質と言われるツイッター、最近鳥がいなくなってXと書かれているツイッターです。ソーシャルメディアで毎年授業をしていて、その300名が毎年15回講義で全部ツイートして課題を出すんです。300×15×1授業で課題が3つくらいあるので、すごい量をツイートするんです。それを全部チェックしていくんですけども、授業で炎上を起こしたら駄目なので炎上を起こさないコツがあつて、そのコツを掴むと、今5、6年はその授業をしています、1回も炎上したことはないです。すごい量です。いろんな学生がいるんですけども、このポイントさえ掴んでおけば炎上はしないです。

そのポイントは、情報発信してはいけない情報、慎重になる情報がありまして、このスライドは写真を撮っても大丈夫です。

これは赤いところは絶対駄目なものです。法律違反とかサービス利用規約に反する情報、この児童性的搾取、ロリコンとかショタコンは絶対に駄目。そういう趣味があつたとしても、内に秘めておけということとか、攻撃ヒート系、基本的にネガティブな情報というのはあまり発信してはいけない。ちょっとでもネガティブだったら、発信してはいけないのではないかと、サービス利用規約をチェックする癖をつけた方がいいです。赤です。

紫のところは事前許可を取るか、情報発信を避けるものです。でも皆さん分かると思うんですけども、他人とか友だちとか家族の個人情報、自分以外が持っている情報は確認が必要で著作権、肖像権などです。

黒いところが知らないことが多くて実は分かりづらいです。自身の個人情報、自分自身が持っている、ほくろがこの位置にありますとか、そういう情報、あとは指紋です。自分自身の指紋は写さないように。ピースとかやるじゃないですか。ギャルとかすごく偉くて、裏ピースをするんですね。皆さんこれからこうやって撮ってください。危ないんですこれは。高解像度ではなく低解像度で撮ってください。こうやって裏ピースで、こうやって撮るんですね、ギャル天才ですね。

自分のこれからの行動情報です。若い子だとソーシャルメディアで、これから夏休みなのでフェスに行ってきますと。フェスに行ってきたフェスのどこの会場どの席に座りますとか言ったりするのはすごく危ないです。終わったこと、フェスに行ってきました。何とかの会場どこにいましたはオーケーなんですけれども、危険情報としてこれから自分がどこに行く、どういう行動をするというのはソーシャルメディアではちょっと危ないので発信しないほうがいい。ちょっと慎重になって、どうしてもイベントをやるから不特定多数の、DJをやるのでどこの会場どこで集まってくださいとか、講演会をやるので集まってくださいはオーケーですが、個人で行動するときに、未来の行動に関してソーシャルメディアで発信するときには居場所とかは慎重になってほしい。

あとはIDやパスワードに関連する情報です。パスワードだけではなくID情報も少し慎重になってほしい。

次は、私は積極的にやったほうがいいと思うんですけれども、政治、宗教、スポーツ。これは会話のときにも言いますよね。政治、宗教、スポーツについては慎重になりましょうと。ソーシャルメディアでも一緒なので、こういった情報に気をつけて情報発信していきましょうということを学生さん、生徒さん、児童に言うと基本的には炎上しません。

本当に知らんですよ。びっくりするんですけれども、普通にパスワードをソーシャルメディアに置いたりするんです。あとは自身しか知らない情報ですね。背中にほくろがある、背中に星形のあざがあるなど、身特徴体的、そういう情報は絶対に言ってはいけない。水着を着る場所は、ネット上上げてはいけないなど、そういうものを知らないんです。なのでこっそり上げたりするので、そういったところは気をつけてくださいというふうに話をしています。

こういうものを、ソーシャルメディアを利用する上で、さっきの慎重にならないといけない、特に赤いところ。赤いところをやるとバカッターと呼ばれたりします。肖像権に違反するとパクツイとかコピーしたりする、パクツイになったりするので、炎上すると情報集約が今すごい早い。一瞬で情報集約されて、私のようなコメンテーターにコメントされ、そして退学になるわけですね。そういうようにソーシャルメディアの利用を、もしよかったら皆様の学校でも情報伝達という意味でいろいろとやっておりますので、周知していただければと思います。

ちなみに、バカッターとパクツイについて、よく知らない方もいらっしゃると思います。知らない方結構いらっしゃるんですね。バカッターは、反社会的な行動でツイッターしたり、フェイスブックに上げてInstagramに上げてバカッターと呼ばれたりしますけれども、さっきの赤色で注意された反社会的なことをバカッターと言ったりします。パクツイは、コピーすることですね。これも禁止されています。パクツイに関しては、ツイッターが最近名前が変わりましたが、ツイッターは自動検出するようになっている。あまりにもパクツイが多いということで、自動検出するようになったので最近減ってきましたけれども、そういうネットマナーを守って使用すると特に炎上せずに、デジタルタトゥー、入れ墨です。情報集約されて、バカッターをしてしまって就職するにも就職できない。デジタルのタトゥーを入れられた状態だということをデジタルタトゥーとか言ったりします。そういうものがないように進行できればというふうに思っております。

学生、生徒、児童の皆さんには、ぜひこの情報を守って情報発信すると、実はいい友達に会えたり、自分の実現したい欲望を実現できたり、いろいろないいことがあるので、積極的にソーシャルメディアは使ってほしいと思います。

ただ、安全性が毎年毎年変わってくるので、今、視覚情報、聴覚情報、言語情報を伝える場合はそのルールを守っていただければというふうに思います。

もう少し時間があるようなのでChatGPTの話をしていいですか。ありがとうございます。

今日、体験を得るために、どういうふうなマインドセットでいたらいいのか、どう伝えていったらいいのか、これをまとめたところなんですけれども、さっき話したいといった技術適用のところに入りたいと思います。

さっきスライドであったところに加えて、理論志向と国語というふうに書いています。これはなぜかということ、最近、ChatGPTも含めAIのユーザーインターフェースが言語に入ってきたんです。そし

てAIのユーザーインターフェースが視覚情報、聴覚情報にもこれから入ってきます。最終的に固有感覚情報にも入ってくる予定ですが、今、言語情報に入ってきているので、現時点では少なくとも理論思考と国語が必要になってくる。どういうことかという、昔プログラミングなどをやるたびに、例えば工学系でプログラミングをやるたびに、仕様書を誰かがつくって、理論思考のある方が仕様書をつくって、プログラマーはこの仕様書どおりにプログラミング言語を書いていくんです。プログラムが動くかどうかをチェックして、ユーザーテストをして結合して渡すということを、プログラマーの仕事としてやっていました。今は、仕様書を書くのとテストまで終わっているんです。つまり理論思考ができれば、もうプログラミングは完了しているんです。分かりやすい事例で言うと、あるプログラムがあったときに、今まで1か月かかるプログラム、仕様書を書くのに1時間、そのプログラムをつくるのに1か月、それから報告書を書くのに1時間であったのが、2時間でもう終わるようになりました。1か月のプログラムがですよ。基本的には2時間です。なのでほぼ人間参加がなくなって、ではどういう仕様書ならいいのか。非言語情報で、いい感じでやってよというものもできないのです。なので、きちんと主語と目的語と述語があって、副詞があって、かつ論旨がずれていない、言葉のぶれがない、そういった理論思考と設計が必要になっていきます。

技術適用をするときに、どの科目を勉強したらいいのかと学生さんに聞かれるんですけども、全科目必要で、これを書く、国語だけがあればいいのかと思うアホな…、アホと言うより若い学生がいるんですけども、国語だけで理論思考は身につかなくて、数学も必要ですし、英語は翻訳機があるから今後必要なくなるのではないかと言う人もいるのですが、英語も自分の言語を他言語から比較するという意味で確実に必要で、文法理解、言語の成り立ち理解が必要で、かつ理科ももちろん必要ですし、生物とか物理も理論思考を身につけるためには確実に必要で、物理と数学の攻め方両方ありますけれども両方必要で、社会は必要ないかと思うじゃないですか。社会は、地理も必要ですし、歴史に関しては、どうやって学んでいって自分の人生に生かしていくか、どういうふうに社会を動かしていくかというものに確実に必要な科目なのです。体育は、徹夜するのに必要ですね。(笑)体育の使い方は人それぞれですが、図工とか家庭科とか保健体育もそうですし、いろんな科目が、技術科目もありますけれども、技術適用をするときに国語だけが必要かというところではなくて、国語力を身につける、理論思考を身につけるという意味では、技術適用ができるという意味では、全科目必須というふうに私は申しております。

ということで、最近、AIが入ってきて人間の働くところがなくなるのではないかとことをおっしゃる方がいるんですけども、確かになくなる人はいます。

例えば、お仕事を振ったときに、「Aという仕事をやってください」というふうをお願いしたときに、分かりましたと言って、「Aという仕事をやってください」という文章をコピーして、ほかの人をお願いするという仕事をやる仕事があるんです。Aという仕事をBさんに頼むような仕事は徐々に最適化されて少なくなってきました。

また、これにキーワードを列挙しているじゃないですか。これを日本語のきれいな文章にしてくださいとか、このキーワード全てをフランクな書き方で文章にして、500文字以内で記載してくださいとやると、それはChatGPTでつくれるので、単純にコピーやちょっと書き換えるとかそういった仕事は確かになくなってきます。

ただ、私たちが未来を発明したり想像したり、自分たちの欲に従って明瞭化して設計していくという、そういうようなお仕事はしばらくはなくなりそうもない。残念ながら人間は自由なので、なくなりそうもないということです。それは私自身も残念ですけども、どちらかというと私もアシモフさんと一緒に働きたくないタイプなので、それは残念だなと思いつつ楽しく働いております。

時間もちょうどいい感じになってきました。

今日お話したかったこと全部がここにまとまっています。正直先ほどなんやかんやとスライドも何も必要ないんです。ソーシャルメディアのところと、これだけ話せばいいと思っていました。

アラン・ケイさんの言葉に加えて、欲で未来を実現するというのと体験を得るという、これからの未来の生き方というところで6個の要素をぜひ大切に、皆さんも知っていたかもしれませんが、もし抜けていましたら大切にチェックしてほかの方々にも伝えてもらえればと思います。

今日は、長い間私の話につき合っただき、かついろいろインタラクティブにして、皆様が農業をしているとか、いろいろな様子も伺えて楽しかったです。

今日は、お時間をいただきどうもありがとうございました。

全体会・閉会行事 8/18(金) 12:20～



開会のことば
大会実行副委員長 内山 直美



次期開催県会長あいさつ
宮崎県会長 小出水 公宏



大会宣言
大会研究部長 渡慶次 憲雄



万歳三唱 熊本県会長 福田 信一郎



全公教会長 吉原 勇 全公教研究部員 川上慎一郎



閉会のことば
大会実行副委員長 松田 健

第63回 九州地区公立学校教頭会研究大会沖縄大会当日参加・欠席者数

県名	県別内訳							実参加 合計 A	資料 参加 B	A+B	当日 欠席	実際 参加数
	第1A	第1B	第2	第3	第4	第5A	第5B					
宮崎県	2	1	5	1	2	7	1	19	54	73	1	18
大分県	16	10	5	10	15	10	7	73	0	73	0	73
佐賀県	3	4	3	3	4	3	3	23	30	53	0	23
福岡県(小)	23	23	14	23	23	28	15	149	0	149	6	143
福岡県(中)	10	15	5	8	5	8	7	58	14	72	2	56
長崎県	6	6	6	15	5	6	18	62	37	99	0	62
熊本県	9	7	5	9	8	7	6	51	52	103	1	50
鹿児島県	15	10	12	15	13	18	12	95	44	139	5	90
小計	84	76	55	84	75	87	69	530	231	761	15	515
沖縄県	54	59	42	56	52	57	42	362	4	366	2	360
合計	138	135	97	140	127	144	111	892	235	1127	17	875

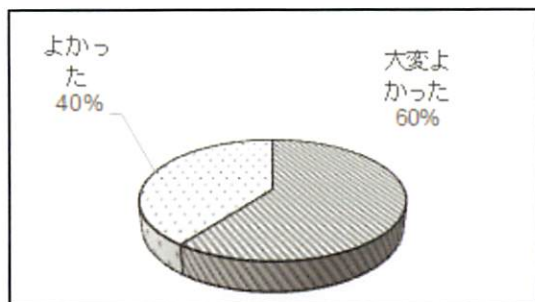
大会参加者アンケートまとめ

アンケート回答者数 (558 人 / 875 名)

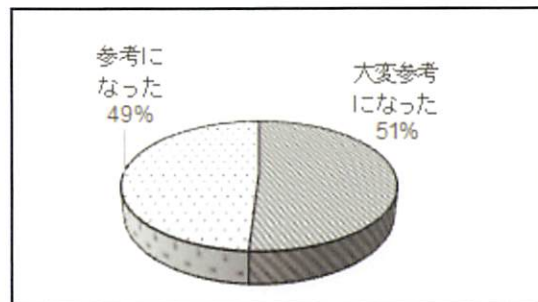
第 63 回 九州地区公立学校教頭会研究大会 (沖縄大会) アンケート結果

1 分科会について

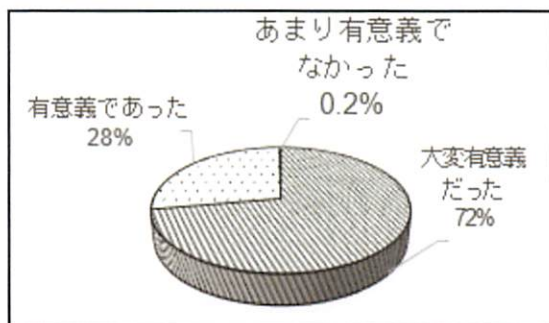
(1) 内容はどうでしたか。



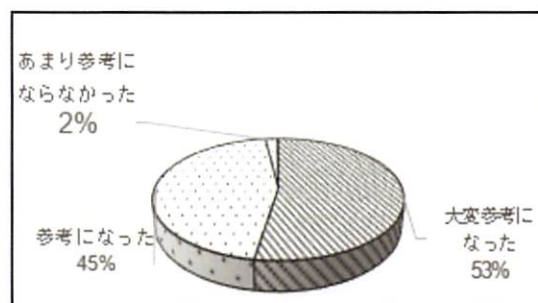
(2) 提言内容は課題解決に向けて参考になりましたか。



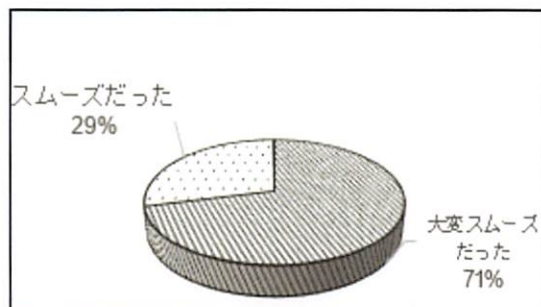
(3) グループ協議は有意義でしたか。



(4) 指導助言は参考になりましたか。



(5) 分科会の運営はスムーズに進められていまいしたか。



(5) 分会会についてご意見・ご感想があればお聞かせください。

- スムーズに運営等がなされていたと感じました。各県の先生方と交流も有意義でした。ありがとうございました。
- 他県の状況の情報交換や困り感・課題等について協議できた。アイデアや工夫を聞く機会にもなり良かった。このような情報交換はもっと時間を取って交流してもよい。
- グループ協議を通して、九州と沖縄を比較できたこと、意見をアウトプットできたことがよかった。

- 参集型で終日同じメンバーだったので少しずつ緊張もほぐれて色々意見が交わらせて良かった。昼食を同じテーブルで食べたので親近感も増した。運営スタッフの皆様も丁寧な対応でした。お疲れ様でした。
- 発表について話し合う柱が明確に示されており、多くの先生方と話す時間がとても有意義だった。

①●3回のうち1回は、テーマをグループに決めさせてもよかったのでは…

⇒研究協議の柱(テーマ)は、全国統一研究主題を踏まえ、提言者が自身の提言と関連した学校課題やその分科会における共通課題等を全体で協議するために設定されます。グループでのテーマ設定は、積極的参加と言う視点では、評価できますが、今後も協議の柱(テーマ)は、提言者からの提案になるものと思われます。

②●スケジュールにもう少しゆとりがあるとよかったです。

提言内容だけではなく、いろんな面で他県の様子を知りたいので、そういう時間があるとよかったです。(2本にするか全体協議をカットするか)

③●提言が3つあり、グループ協議も3回実施し、グループ内の仲が深まることは、良いことだと思います。ただ、提言3つは多いかなとも思いました。

②③

⇒『令和11年度までの九州及び全国研究大会提言分担表』【備考1】に次の通り明記されています。【備考1 提言分担は、これまでの担当の仕方を引き継ぐ。各県とも2分科を担当し、毎年1課題ずつずらす。開催県は、全分科会で提言する。】

④●各提言への指導助言は、必要かもしれないが、分科会のまとめの指導助言は必要性を感じなかった。

⇒本研究大会は、3C(継続性・協働性・関与性)に焦点を当てた実践的研究です。「分科会のまとめ」においては、その点についての指導助言もいただいています。

⑤●全体協議の時間を減らし、グループ協議の時間を増やすとさらに議論が深まると思いました。

⇒課題解決の糸口となる情報等を全体で共有出来る場です。司会の声かけで発表グループ以外の情報提供の場としたり、活発な全体共有をしたりという時間を期待したいところですが、手が挙がらない場合は、次の提言時間に移って良いと思います。

⑥●記録の方が記録と発表に追われ、じっくり落ち着いて参加できていない感じがして気の毒でした。全体で共有する時間はなくてもいいと思います。記録ももっと簡素化したほうがいい。

⇒沖縄県那覇支部会員が全体的な運営係、その他の沖縄支部会員がグループ司会・記録を担うことで来沖なさる九州会員の皆様へのおもてなしと、沖縄会員みんなで大会に関わるという意味あいもあります。「記録の仕方や簡条書きキーワードのみの記入」のように記録係で工夫して負担を軽くしていけたらと思います。記録への協力、本当にありがとうございました。

⑦●分科会では記録係だったため、先生方の話をまとめて書かないといけない。また、発表に当たるとかと思うプレッシャーでとても協議会は有意義ではなかった。発表は事前に決めていて欲しいと思った。

⇒発表担当にあたるグループ記録が事前に分かったら、グループ間の熱量が違ってしまいます。緊張はすると思いますが、全てを記録、発表するのではなく、全体に伝えたい内容に絞ってまとめる等、情報交換の場として捉えていただけたらと思います。

⑧●会場横モニターに、プレゼン資料が映ると大変助かります。(第1 B分科会)

⑨●提言者の資料が正面のスクリーンのみの提示だったため、後方からだと見えなかった。また、話し手が何処にいるのか分からなかった。(第3分科会)

⑧⑨

⇒各会場施設によって、設営の厳しさがあったと思います。せつかくの発表がよく見えなかった点お詫び申し上げます。プレゼン資料をPDFにし、QRコード化し見えない方には、手元のスマホ等で見てもらう等の工夫も検討できたらいいのですが……。

⇒提言者は、直前までプレゼン資料に取り組んでおり、事務局への提出義務はありません。会場の様子に応じて各会場担当で上記スマホ等対応(係の配置が可能な場合を含めて)は、熟考が必要です。

⑩●周りの話し合いの声が大きく、自身のグループの発言も拾いづらい状態であった。司会をしていたため、聞く事にかなり集中を要し、メモが十分にできず学んだことを持ち帰るには、少し足りないことがあった。(第5 A分科会)

⇒会場施設によっては、隣人との距離が短く聞き取りにくかった点があったかもしれません。申し訳ありません。しかし、100名を超える会場確保は厳しい状況にあり、ご理解いただき、司会の方から『隣のグループのことも配慮しながら…』と会場状況を詫言しながら協力をお願いするしかありません。

⑪●運営ありがとうございました。これまでは、事前に1日目、2日目のスケジュールがわかる公文が配布されていました。今回、事前情報がなくて弁当も準備されているかわからず、心配していました。また1日目の司会に割当られていましたが、シナリオがあるのかないのかも聞かされていなくてとても心配しました。

⇒令和5年開催の九州大会は、前年度11月に第一次案内、及び開催年の4月に第二次案内を配付しています。新会員の場合、前年度教頭からしっかり引継を行う必要があります。

⇒沖縄会員の皆さんには、年間会費で沖縄大会并当代の徴収説明も「総会要項」に明記してあります。今後は、各支部での周知徹底、各会員の資料熟読依頼も更に強化していきたいと思えます。

⑫●各分科会の記録や司会の担当に対しては事前の周知が必要だったかと思う。当日に試行錯誤で担当していたので困惑しました。役員に当たった先生方については、かなり大掛かりの研究大会だったので大変さが伺えました。本当にお疲れさまでした。

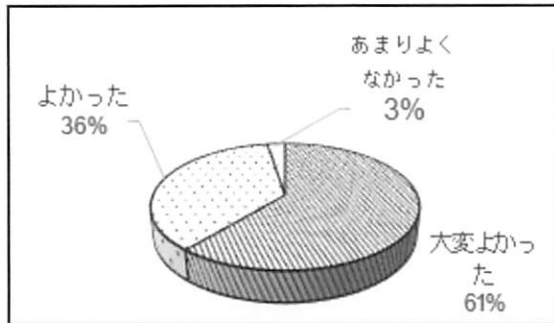
⇒グループ内の司会・記録の件でしょうか？かなり早めに各支部へ連絡済みのはずです。

例年の沖縄県大会よりも早い時期での連絡、4年ぶりの研究大会開催も重なり、支部内での周知が難しかったのかもしれません。直前での確認依頼等も次回大会に引き継ぎます。

また大会の日程やグループ司会・記録のマニュアル(シナリオ)等は、6月に配布した「沖縄県教頭会要覧」P-43~47に掲載しています。要覧配布時の案内に明記しておけば早期確認で安心して買えましたね…ドキドキさせてすみません…

2 全体会について

(1) 記念講演はいかがでしたか。



(2) 記念講演についてご意見・ご感想があればお聞かせください。

- 予測困難な社会を見据えた内容で良かった
- 欲望が土台となり夢の実現につながっていく。教育のあり方が、教えることから始まっていることで、生徒の欲望に答えられていなくなっているように感じた。これからキャリア教育の重要性が高まるのだろうと思う。
- これからの社会に必要な講話、提言があった。是非、今後の業務、キャリア教育に活かしたい。
- 欲は人生を豊かにするエネルギーだなと感じました。あんなに目標をしっかり見据えて頑張っている方がいらっしゃるなら、まだまだ私は伸び代があるなと思いました。
- 情報工学の面だけではなく、欲求を形していくという段階的な目標実現の取り組みは、教育において非常に参考になった。明確な目標とそれを実現させる論理的な思考、「美しい日本語で話す」ことの大切さが非常に印象に残っている。あっという間に時間が過ぎた講演でした。久しぶりに楽しい講演会になりました。ありがとうございました。
- 大変貴重な話が聞けた。自分たちが育てたい子どもの姿のその先に玉城先生がいると思う。どうやら玉城先生のような発想力や行動力のある人が育つのか、自分自身の欲ってなんだろうなど、玉城先生の講演を聞きながら思考が刺激されまくりであった。
- 新しい視点から、今後の視野が広がった。
- 玉城先生の講話は、これからの子供達をどう育てていくか方向性を示していただいたり、今後の社会の変化も勉強になりました。先生方にも共有したいと思います。
- まだまだ先の事だろうと考えてことが、気がつけば目の前に存在する。そんな内容をわかりやすく説明して下さり感謝です。教育分野でも新しい技術はどんどん導入されると思う。だからこそ、私たち教員は、常に前進する必要があると思った。
- やりたい事があればできる！と言われていた様で励みになりました。チャレンジしようと思欲を持つ事はできました、
- 講演の中で「未来を予測する最良の方法は未来を発明すること」という言葉があった。予測困難な未来を生き抜く子どもたち対し、私たちは学校教育を通して夢実現に向けた未来へのビジョンや社会に適応できるマネジメント力、また持続可能な社会の担い手となる人材の育成が大切であると改めて考える機会となった。
- 10年後、20年後の未来を見越して教育を進めることの大切さを再認識できました。先進的な技術もさることながら、幼少期の自然体験を十分に味わわせ、誰一人取り残さないというコンセプトを具現化させるかが、我々の使命だと再認識していました。
- 玉城教授の講演を拝聴し、これからの未来が我々の想像を遙かに超えたものになると感じた。未来をたくましく生き抜く児童生徒を育てるべく、学校は何ができるのか考えていくことの重要性を改めて強く感じた。
- このように夢を実現している、しようとしている方のお話は説得力があり、子供たちに伝える価値があると感じます。夢をどのような実現していくのか、大切な視点やプロセスを学びました。これは、教頭としてのマネジメントにも通じるものであると感じました。

- 通常では聞くことができない内容で、非常に有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。
- 教育関係者でない方でその分野のトップの方のお話はとても勉強になりました。
- 正直、ついていけない内容も多かったですが、様々な分野から教育業界への改善・改革の方策が練られていることは理解できたし、ありがたいと思いました。
- 時間が許せばもう少しお話を聞きたかったです。

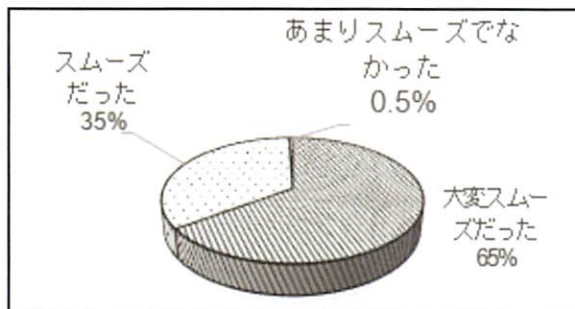
⑬●内容が難しかった。今日的な学校課題に向き合える内容がよい。

⇒大会誌のプロフィール欄にあわせて、概略が掲載できるよう検討したいのですが、大会誌原稿締切が早いため、講師の講話決定スケジュールに左右されます。

⑭●講演の資料があればありがたいと思った。

⇒手元に資料があると理解もできるのではという視点は大切だと思います。講師に資料提供可能ななどの確認を検討していきます。

(3) 全体会の運営はスムーズに進められていましたか。



3 大会全体を通してのご意見・ご感想があればお聞かせください。

- ホストの沖縄県の副校長・教頭先生方に企画、運営、実施と大変だったかと思います。大変貴重な体験をさせていただいて、この夏の自分自身の大きな学びとなりました。
- 運営にあたった那覇支部の先生方、本当にお疲れ様でした。とても素晴らしい運営でした。ありがとうございました。
- 大会が、那覇中心部ということもあり移動、宿泊等、とても効率よく旅程を組めました。
- 参集型の研修を開催してくださってありがとうございました。
- 4年ぶりの開催で開催事務局のご苦労が伺えました。参集型は熱が伝わりやすく、今後の職務遂行に大変有益だと思いました。

⑮●会場に入れる時間が9時で、外に待つことになっている県外の先生も多く、暑くてかわいそうでした。

⑯●会場への入場時間をもう少し早くしていただきたいです！会場外で待つ時に、暑くて大変でした。大会の運営等お疲れ様でした！学んだことを学校現場で生かしていきたいと思います。

⑰●なは一との借用上開館が指定できなかったと思いますが、遠方からは到着時刻の調整が難しいので早く到着することが多いです。開館を受け付け時刻より早めにしてもらえると助かります。綿密な計画及び運営に感謝します。関係者の皆様、お疲れさまでした。

⑮⑯⑰

⇒900名前後の会員の移動アクセスを考えると那覇市内の会場に絞られます。『なは一と』は制限が多いのですが設備も整っており、何より那覇市の「特別予約」により、かなり安価で借用できています。次回は、今回の反省を生かし、開館時間の前倒しについて那覇市との調整を再度試みます。暑い中、開会行事定時開催への御協力に感謝いたします。

⑱●全体会の開始時間は8時受付、9時開催をして11時には終了して、飛行機の手続きや沖縄観光（社会研修）に費やしたいと思います。（私の意見ですいません）

⇒全体会の持ち方等を検討して時間短縮の工夫が必要ですが、研修としての予算をいただいて大会に参加しているので、午前中早期終了は厳しいのではないのでしょうか。

※ その他、アトラクションに関しては、九公教代表者会議内の『申し合わせ事項』において、「九州大会では、アトラクションは実施しない」と明記されております。

⑲●全体会の終了を12:00とするほうが良い。

⇒大会全般を通して、時間等の見直しも検討します。

⑳●開催時期をお盆の時期からもう少し離してもらえるといいかもです。

⇒九州大会開催期日は、九公教代表者会議内の『申し合わせ事項』において、「開催年の3年前に第2回九州代表者会議で承認を得る。また、原則として8月25日以降は開催しない」と明記されております。その中で本土や沖縄のお盆の時期を外し、長崎原爆投下日（8月9日）を避けて設定されております。九州各県の事情で多少のズレは生じるとは思いますが、この時期の開催をご理解ください。

㉑●閉会行事は、講演会終了後に間髪を入れずにすぐ実施でよかったとおもいます。そのかわり、講師の話の途中で、少し休憩を入れてはどうでしょうか。閉会行事の参加者も増えると思います。

⇒閉会行事の退席が気になりましたね…。ご提案の通り「講話間に休憩をとり終業後は、閉会行事を続けて行う。」は名案かもしれませんね。ただし、講演から閉会行事への舞台転換やアナウンスの工夫が必要です。

⇒各県の教頭会に閉会行事まで、しっかり参加する様、会員周知をお願いしたいと思います。

㉒●参集されていない、他県の会員の方も参加できるよう、オンラインを合わせたハイブリッド型でできると良いかもしれませんね。お疲れ様でした。

⇒全国大会のようなハイブリッドは、理想ですね。しかし九州大会は、予算が少なく（ハイブリッド開催は数百万円を要する）オンデマンド（後日配信）の検討が限界です。

㉓●那覇地区の先生方、諸準備たいへんお疲れさまでした！ 閉会行事の万歳三唱は違和感があります。一本締めでもよかったのでは。

⇒沖縄県では、あまり見られない光景で驚かれたかもしれませんね。九公教研究大会では、令和11年度の大会まで閉会行事の万歳三唱割り当て県が明記されております。変更するには、九公教の代表者会議を経る必要があります。

アンケートへの回答協力ありがとうございました。

次回大会への貴重な声が届き、2031年（未定）は、よりよい九州沖縄大会がお届けできそうです。

第63回 九公教研究大会沖縄大会 写真集



8.16.水 提言者打合会会場 なは一と小劇場



8.16.水 提言者打合会 なは一と小劇場



8.17.木 1日目分科会 各県事務局控室 八汐荘3階



8.17.木 分科会会場 県外会員受付 マーカーチェック



8.17.木 分科会 弁当

8/17(木)分科会
 印鑑をお忘れの先生方へ
 明日8/18(金)『なは一と』全体
 会場へ必ず印鑑を持参して下さい。
 ※もし、明日もお忘れになった場合には、
 個人で『八汐荘での押印』が
 必要になります。
 お気をつけ下さい。



8.17.木 分科会 弁当



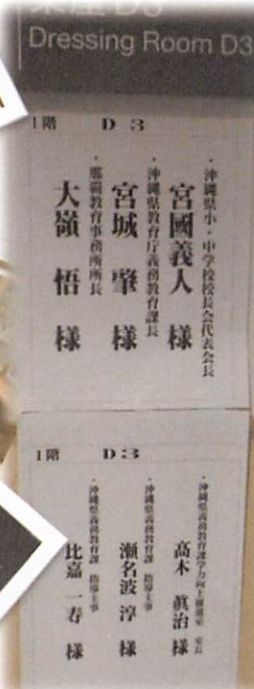
8.18.金 全体会 県外受付 なは一と大劇場



8.18.金 全体会 県内受付 荷預りなし なは一と大劇場



8.18.金 全体会 県外会員用 クローク 約100/500 名利用





玉城 絵美
琉球大学工学部 教授

「記念講演者」 玉城 絵美

H2L, Inc.; CEO
琉球大学工学部 教授
玉城 絵美



沖縄大会への参加 ありがとうございました。



第63回 九州地区公立学校教頭会研究大会 沖縄大会 報告誌

令和5年 11月 CD 配布

編集者：九州地区公立学校教頭会研究大会 沖縄大会事務局
〒900-0014 沖縄県那覇市松尾1丁目6番1号(八汐荘3階)
TEL/FAX：098-943-8573 Email：okikyoto@galaxy.ocn.ne.jp